

次 目

釋尊の大慈悲(下)……………	本多日生
開目鈔講話(承前)……………	小林一郎
本尊論破邪篇(三)……………	河合陟明
大日本帝國の聖業と帝國を環る列強の動向……………	佐藤阜藏
時難を救ふもの……………	磯部滿事
合掌三昧……………	金城三郎
記事	
○本部團報	
○青年團報	
○團費誌料寄附金及維持費領收	
大藏經要義續篇(其二十二)……………	本多日生

第十四卷五年六月號



財團 統一團趣旨
法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追隨ヲ許サマル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ淵遠 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團 畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シ
テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ
理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」
ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ
ラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五
圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金
貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員
トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ
無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

釋尊の大慈悲 (下)

本多日生

法華經では譬諭品の中に、前に申したやうに人々が唯だ目前の歡喜を趁うて、さうして實は心の悶え
を去ることが出来ない、物質的の幸福を求めんと焦慮るが爲めに、精神の中には何時も苦しみを持つて
居る。衆苦充滿して洵に恐ろしい人生のやうに見える。そこに生老病死の憂ひがあり、如何なる人もそ
の惱みより去ることが出来ない、その苦しみの火は人生の總ての物を焼き盡さんとして居るのである、
如何にも憐れなことである。どうぞしてこの世の中の人々が左様な苦しみを感ぜないやうに、この人生
に處して生きながらさういふ苦痛から解脱をして、往いては永遠に再び左様な苦しみに陥らないやうに
してやりたいものであるといふ事を、譬諭品に於て呉れ、お説きになつて居る。譬諭品は人生の苦し
い有様を火事の行き居る宅に譬へて、その宅から子供を救出す事柄を佛の親切に譬へてお説きになつ
た。さうして茲に主師親三徳の文と申して「今此三界皆是我有」等の有名なる經文があるのである。こ
れは實に慈悲の現はれとしてこれ程の現はし方はない、自分は親であり、師匠であり、又主人であつ

て、主人の部下に對する親切、親の子に對する親切、師匠の弟子に對する親切、皆な一人にして有つて居る。我れはあらゆる方面に於て衆生を救はんとして居るものであるといふことをお説きになつた。

次の信解品に至つて、その禮を申上げた弟子の言葉の中にも、恰かも長者の子供が迷うて出て乞食になつて居つたのを、親の方では一日も忘れずして、どうぞその子供が戻つて来て長者の家督を相續するやうに倉の寶を皆な與へたいと思つて御心配なさつて、さうして自分は一日でも往來の見えない所に住んで居らない、子供が往來を通りはしないかといふので、宅の拵へ方をかへて、何時でも往來の四ツ角の見える所に住つて居られて、臨眼もふらないで自分の子供が歸つて來はしないかといふことを待つてお居になつた。所がその子供が父の門に立つた、長者は非常な歡喜を以つてこれを迎ひ入れやうとせられたけれども、乞食根性が浸みこんで長者の宅に這入らないので、いろ／＼な方法を以つて遂にこれを救ひ上げて長者の家督相續といふことになつたといふことが説いてある。この途ゆく者を凝視めてさうして救ふ機會があればと言つて待つて居つたといふことは、前に申す佛様の慈悲が何時も間斷なく我等の上に被さつて居ることを示すので、こちらが信心の心に戻つて來れば、何時でも感應御利益といふものはあるのである。こつちが横を向いて餘所の方に行くものであるから、佛の救ひから漏れて來たのである。佛の力も廣大無邊であるが吾々の惡業も廣大無邊で、お互は永い間、繰りかへし／＼遣り損うて來たのである。それは考へなければならぬことである。今一遍ではない、生れかはり死にかはり

幾度か流轉を繰返して來た。さうして畜生や何かに生れて見れば、さう善い事といふものは出來ない譯である、人間でも少し低い方に落ち込んで人格の無い者に生れたならば上に昇ることはなか／＼出來ないと思ふ、昇るべき性質は有つて居つても、或る程度以下に落込んだならば、例へば不良少年なら不良少年の仲間一旦墮落した者が、足を洗つて善人になるといふことはなか／＼困難である。そこまで行かない中ならば直ほるけれども、一旦そこまで行つてしまふと容易に戻ることが出來ない。又泥棒になつて二遍も三遍も牢に入れられたとか、姪賣婦になつて五遍も七遍も拘留されたとかいふ者が、純良な人間にかへるといふことは非常な困難である。況んやそれが人間より以下の動物が何かに落込んだならば——馬に生れたとか犬に生れたといふことであつたならば、その犬の仲間にして善根を積んでさうして向上して來るといふことは、どうしても出來ないことになると思ふ、それ故に衆生の業力不可思議といつて、佛様の廣大なる救濟の力に對抗するだけの煩惱業を有つて五百塵點劫來今日に流轉を辿り來つたと言はれる譯である。さう何も特別に悪い事をして罪を重ねる積りではないにしても、一旦畜生に墮ちるとか脩羅に墮ちたとすれば、その果報として脩羅の世界に行けば唯だ人と喧嘩をするやうな氣分ばかりになつて、善根といふものを積まないからして、その次の生には又下に墮ちなければならぬ。斯くして墮ちかければ再び向上の岸にのぼることは出來ないと思ふのである。これは私は深く自分で考へて居ることでありますが、教もさうあるけれども如何にも人間はさういふものであらう、楷子の段をガ

タツと一段踏み外したならば、マア下に疊があるから、そこで腰を打つた位のことでは済むけれども、疊がなかつたとしたならばドツツと何ぼでも落ちてしまはなければならぬ。「汝は何をふまへて立つか」といふことを佛は始終言はれて居る。「私は疊をふんで立ちます」といふのは肉體が立つのである。汝の心が肉體と離れた時、何を踏臺として魂が止まるか、身は地の上や疊の上に止まるけれども、汝の心は限り無き沈淪の底に墮ちて行きはしないか。提婆達多が大地に穴があいて地獄の底まで真ッ逆様に落ちて行くといふことがあるが、如何にもさうであらう、身體は土が在れば止まるけれども、魂は業を有つて居るが故に止めるものがないかと言はれた。これだけは理窟以上に私は深く感じて居るのである。或る程度以下に墮ちこんだならばモウ昇るといふことは困難なものである。千葉縣あたりに底無沼といふて底の無い田地がある、船に乗つて下の方にチヨイ／＼と稻を植えて歩く、若しも踏み込んだならばズブ／＼と軟らかな土が何丈とも知れん程あるのであるから、逆も這入ることは出来なぬ、船に乗つて稻を植を付けて、船に乗つて稻を刈つてさうして米を穫る所がある。その船から下に墮ちたならば水は一尺かそこらであるけれども、泥が何丈といふ深いのであるから、こちらの足を抜かうとすれば一方の足がズブツと這入る、こつちの足を抜かうとすれば片方が潜るといふ譯で、終には頭までズブ／＼と行つてしまふ。それが三丈とか五丈とかいふのではない、惡業の結果は何百丈とも何千丈ともわからない底の無い無間地獄の底までズブ／＼と墮ちこんで行くのだといふことになる、考

へただけでも「これは堪らぬ」といふことになつて、實際それはモウ身の毛の戦慄のことである。

そこで佛様は仰しやるのである、汝等が業の爲めに左様に墮ち込むといふのは如何にも可哀さうに思ふ。親は達者な子よりも病身の子のことが餘計氣にかゝる、親が年老つて死にかけた時分に考へれば、兄の方は相當確かりしたけれども、弟の方はまだ學校を落第したりマゴ／＼して居る、友達に悪い奴があるやうだが、あれは親の亡い後にはどんな人間になるだらうかといふやうに、行先きの見定めのかん者ほど親は苦勞にするものである。一切衆生の罪ふかく見定めのかね者は、如來の慈悲に於て特に可哀さうに思ふといふことを説かれて居る。さうすると吾々はさういふ御心配を親にかけて居る、永い間十遍や百遍ではない、百年や千年ではない、始め無き以前よりの魂が今日に來つて、今人間に出て大分善いやうに見えるけれども、まだモウ一つ見定めのかん所があつてグラ／＼して居る、親の眼から御覽になつたならば洵に心配なことであらうと思ふ、その御心配をかけて居つたといふことは相濟まぬといふ所に感激があるのである。だから今度はどうしても確かりしななければいかん、それがこの長者と迷つた子供の話に於て、父は斷へ同なく途ゆく者を凝視して居つたと言はれるのは即ちそれである、子供は五十年の間迷つて漸く辿りついて始めて門に立つたけれども、而かも父を見ては遁出したといふ状態に吾々は居るのである。

次の藥草論品に行けば、天から雨が降つてあらゆる木も草も生ひ立つが如くに、佛の慈悲に依つて一

切衆生高きも低きも皆な救はれるものである、愚かなる者も賢き者も皆な救はれるものであるといふことが説いてある、これ等も實に佛の慈悲の徹底が能く現はれて居る、佛みづから言はれるには、我れは決して偏頗な考へを持たない、賢き者でも愚かな者でも皆な普く平等に愛する。大勢を愛するからと言つて我が慈悲はパーツと薄くなるものではない、一人の子を愛するが如きものである。十人も二十人も子供があるといふと、一人やそこらはどうでも宜しいといふやうなことを言ふ人があるけれども、それは嘘である。落つて考へて見たならば、子供が餘計あるからして一人や二人は自動車に轢かれてもよいといふことはない。それと同じやうに一人の子を愛するが如く衆多にも亦然なり——佛の慈悲は大勢の者に對ふけれども、それは一人子を愛するが如き熱烈なる親切を有つて居るといふことを能くこの藥草論品には説いてある。

左様にして慈悲の教訓はズツと法華經には充ち満ちて居る、さうしてさういふ親切が始め無き以前より續いたといふことを説きになつたのが法華經の壽量品である。壽量品には佛は始め無き以前より十方世界に働いて居るが、それは唯だ衆生を濟度せんが爲めである。さうしてその慈悲の精神は暫くも休む時はない、「毎に自からは是の念を作す、何を以つてか衆生をして」と仰せられて、いつでも衆生を救ふことより外考へては居ないと仰しやるのである。

それからズツと進んで法華經から涅槃經に行つて見ると涅槃經にも殊に慈悲の教訓が充ち満ちて居るのであります。佛法の大部分は佛の慈悲の徳を讃歎するにあるのである。あなた方でも信仰が進んだ整うたといふたならば、佛様の慈悲を讃歎する言葉が殖えて来る譯である、自分が信心をして居りながら佛様を有難いといふことを語ることが少い間は、その人の信心は確立して居らないと言はなければならぬ。

そこで日蓮聖人の聖訓を拜するとやはりさうなつて居る。日蓮聖人は御遺文の最初頃からして佛様の有難いことをズツと書かれて、「立正安國論」の中にも一番大事なところに行くと「弟子一佛の子と生れて諸經の王につかふ」自分は佛様の子であつて佛様の慈悲の中に活きて居る者であるといふことを以つて感激せられて居るのである。「開目鈔」の如きは始めから主師親三徳の事をお書きになつて、さうして佛様の有難い意味合ひを縦横無盡に説かれたものである、その佛様の有難いことが能く判つたらそれは目の開いた人であるし、それが判らんければ盲目である、どの位學問して居つてもどんなに立派に見えても、この壽量品の佛を意識しない者は畜生なりと書かれた、「壽量品を知らざる諸宗の學者畜生に同じ、不知恩の者なり」と言つて、本佛の大恩に感謝する精神が開目鈔の中心思想となつて居るのである。

そこで日蓮聖人は自分みづからいろ／＼の迫害にお會ひになつても、いつもそれを慰める力といふものは本佛を思ひ起すことなのである。開目鈔にもその事が書いてある、自分は今佐渡ヶ島に流されてな

かゝ辛い、「當時の責は堪ゆべくもなければども」とあるから、モウ堪えられん位苦しいことであつたのでありませう。「齒がみを爲してとあるから寒さに對してもグツと齒をくひしばつて、その寒さを悚へられたものだらうと思ふ。日蓮聖人が如何に豪傑だからと言つたところが肉身を持つ以上は、塚原三昧堂のあの隙き間も風は肌を劈き、雪は一丈の餘も積つてその中に居られて、十分に火も無ければ布圍も十分でない、「簑を着て四ヶ年」と言はれた言葉から考へたら、それは辛かつたに相違ないのである。その寒さが骨身に徹するといふ時にも「ナニ」と齒がみをなしたのは、これは佛様の大慈悲を思つてそれに依つて堪へられたのである。だから三昧堂の隅には隨身佛の釋迦一體を安置すると言つて、一間四面の辻堂の狭い隅の所に棚を拵へて、そこにお釋迦様を祀つてお居でになつたのである。釋尊と共に宿り、釋尊と共に起き臥しをする、それが日蓮聖人の艱難に堪へ忍ぶ力であつた。

その意味が日蓮聖人の聖訓には非常に能く現はれて居るので、私はその「聖訓の摘要」といふものを先年統一閣で講じたことがある、幸に速記が完備して居るので、何れの日か世に出る時もありませうが、それは御遺文の中に現はれた釋尊の慈悲に就いての聖訓を殘らず擧げて置いた、實に澤山あり過ぎると思ふ位日蓮聖人は釋尊の慈悲に感激せられて居る。だから大事の場合には直ぐさう出て來るのである、龍の口の場合でもその感激は「慈父大覺世尊代らせ給ふ」、佛様が身代りになつて下さつたから日蓮の頭は切れなかつたのであると言ふて感謝せられた。又伊豆の伊東に御流罪の時でもやはりその通

り、自分は末代に生れて佛の恩に酬ひたいと思ふけれども、兎角他事の方に氣が散りたがるのであるが、幸に今度法華經の爲めに流されて、晝夜ともに法華經の爲めに盡すことの出來るのは、これくらゐ有難い事はない、これを以つて佛恩に酬ひたいと言つて居られる。又佐渡に於て愈々迫害が迫つて、モウ助かるまいと思はれた時、「今年今月萬が一にも身命はかりがたきか」といふ時に於ても「幸なるかな未だ見聞したてまつらざる教主釋尊に侍りたてまつらんことよ」殺されるのは辛いけれども一方に嬉しいことがある、今度は愈々この塚原三昧堂で暗殺されてしまふかも知れぬ、併し殺されれば今まで會ひたいと思つて居るお釋迦様の所に行かれるのであるから嬉しいといふことを言はれて居る。その如何なる場合に處しても釋尊を慕うてお居でになることは、大難に迫るに就いて益々はつきり現はれて來るのである。さうして日蓮聖人平素の信仰としては何時も申上げる通り、「暮れゆく空の雲の色にも有明がたの月の光にも心を僅ほす思ひなり」毎自作是念と言つて佛は何時も慈悲を有つて居ると仰しやつた言葉は、暮れゆく空の雲の色そこは佛が御座るのだと思つた時に「毎自作是念」の光としてこちらに感激が起る、或は夜明けの月の光を拜した時にも、自分は寢て居つたけれども月は徹宵照して居つたが如くに、釋尊の大慈大悲は眠れる我が上にもこのやうに輝いて居つたのかと思つて感激に堪へな

ら、「毎自作是念」の御言の葉、實に感謝に堪へんといふことを仰せられたが、これがモウ日蓮聖人の純粹の信仰である。

左様にして日蓮聖人の聖訓に澤山現はれて居ることは、「聖訓摘要」の中に自分が相當の年月を費やして話をして置いたから、何れの日か世に現はれると思ひますが、前申したやうな意味に於て釋尊の一代の事實も、又法華經なり日蓮聖人の聖訓なりに現はれて居る所を見ても、お互の信仰は佛様の有難いといふことに感激しなければならぬのである。これが死んでからばかり助かつて行くのではない、如何なる場合に於ても釋迦如來はその者を憐んでお居るのであるから、そこで釋尊の御心を休めようと思へば、自分が餘りつまらんことに心配をせぬ人間に成らなければならぬ。親を安心させようと思ふには、自分が苦勞をしない人間に成らんければ、親の安心はないのであるから、どうしたら釋尊の大慈悲を休めたてまつることが出来るかといへば、第一は信心堅固にして、「如何なる場合にもこの信念、正念不動の精神に居ります」といふことが言へれば、外の事は少々ぐる狂つても、「それでお前は結局は助かるナ」といふ所で佛に御安心をさせることが出来る。さうして現在生活の中に詰らん事を餘り氣にかけんやうに精神生活を聞いて、悶えのない人間になつて、その時と處とに處して適當にこれを按排して人生の生活を續け、最後は安心して眠りに就くといふことにならなければならぬ。「佛さまモウ御心配下さいますナ、この信心を得た以上は自分は現在生活と永遠生活の上に方向が立つて居りますから……」といふことを申上げて、さうしてこの御心配を少しでも除きたいものである。それは日蓮聖人もさういふ風に仰せられて居る、如何にせば佛様の御心を慰めたてまつることが出来るか、要するに信念

堅固にして現在の生活は法悦感激に住し、さうして間違ひなく成佛を遂げて行くやうにしてこそ、佛に酬ひたてまつることが出来る譯であります。それで平生は先程申したやうに、その有難い感じを喚び起す爲めに「南無妙法蓮華經」と唱へるのが私は善いと思ふ、お題目が一念三千だとか、お自我偈の字が光つて居るとかいふことは附けたりのお教養である。吾々の信念はその人格の佛様がいづも實在に護つて下さつて居るといふことを痛切に感じて、こちらは眠つて居つても佛様の光は來て居る、如何なる場合にも我等を捨て給ふものではないといふことを堅く意識することが自分の光であり、それが自分の力であり、そこに信念決定といふことが得られるのであらうと思ふ。

その點に於て私は婦人の方が男よりも幸福であると思ふ、斯ういふ情操に感激するといふことは婦人の特色であつて、男子はどうしても理智の冷やかな方に向きたがるものである。女のさういふ情操感激、所謂涙に脆いといふことが釋尊の慈悲に就いて起れば私は男子よりも女子の方が幸福であると思ふ、それは或るお經にその事が説いてある、舍利弗が非常に威張つて女の人の向つて「あなたの教は小乗が大乗か」と言つた時に、その婦人は「さういふ大きいとか小さいとかいふやうな小理窟は嫌ひぢや、私の教は大慈悲乘である、あなたのは理窟の大きいとか小さいとかいふ大乗小乗であるが、私の方は佛様の慈悲に潤澤して居る、大小などといふ問題ではない」と答へたことが婦人に關するお經の中にあります。それで舍利弗はギャフンと參つてしまつて居る、これは今日あなた方に最後の言葉として

告げるのであります。男子は大乗小乗ナンといふ所にひつかゝるが女子は慈悲乘に感激して行くことが出来るのであるからして、宗教の中心をなす感謝の精神は、女子の方が特色を帯び易い。それ故に人類の間に古今東西となく女子に依つて宗教は維持されて行くのである、この事はあなた方もどうぞ御記憶になつて、舍利弗が大乗小乗いづれなりやと言つた時に、婦人が私の教は小大ではない、慈悲の教に潤澤して居ると言つた、この言葉をもちえなさらんやうにありたいと思ふのであります (完)

佛告げたまはく、昔、國王あり、鴈肉を喜び、常に獵師をして、網を張りてこれを捕へ、日に一鴈を送らしめて以て食膳に供へぬ。

時に鴈王あり、五百の鴈を將ゐて下り食を求め、偶々この網に墮つ。餘鴈驚き徘徊して去らず、中に一鴈あり、連りに追隨して弓矢を避けず、悲鳴血を吐き、晝夜息まず、獵師これを見てその養を憐み、即ち鴈王を放ちしかば、群鴈王を得て歡喜廻繞せり。獵師具に王に聞す。王亦これに感じて其後、鴈を捕ふことを廢せりと。

佛、阿闍世王に告げたまはく、爾の時の鴈王とは我が身これなり、一鴈とは阿難なり、五百の群鴈とは今の五百の羅漢なり、國王とは今の大王是なり、獵師とは今の調達是なり。かの調達は、前世以來、恒に我を害せんとするも、我は大慈の力を以て、怨惡を念せず、以て自ら佛を得ることを致せり

—法句譬喻經—

開目鈔講話

(承前)

小林一郎

さういふ譯でありまして、惡人成佛、女人成佛といふことは、本當に佛の教を、魂を籠めて學びさへすれば、何人でも迷ひを離れて覺りの境界に這入れるといふことを根本から明かにされたものだといふ風に解釋して見ると非常に有難い、又尊いことなのであります。

であるから、龍女の成佛は一人ではない、一切の女人の成佛を現はしたので法華經以前の小乗經では女人成佛といふことを許さない。これはマア方便の教であつて、極く口元の方の教でありますから、さういふ教の中では女が佛に成るといふことは言はな

い。大乘經典の中には「成佛往生」女でも佛に成つて極樂淨土に生れることが出来ると言つて許して居るものもあるけれども、併しそれは改轉の成佛である。改轉の成佛といふのは境遇が變つて佛に成ることを言ふ。改轉といふのはマア念佛宗、今の淨土宗ではさうなつて居る。この世では佛に成れない、この世はモウ仕様がなから、極樂淨土へ併して行かれればその時佛に成る、斯ういふのだから改轉であります。境遇が變はる、さういふやうな所に行つてから佛に成ると言ふ。

併し法華經の方ではさうではない、天台大師が一

念三千といふことを言つたやうに、今の吾々の心の中に佛に成る本性があるのだから、今この肉體で、此土で斯うやつて居るこの儘でも、自分の心が一たび變りさへすれば、凡夫を離れて一歩々々佛に近づいて行く。斯ういふのであります。同じ佛に成ると言つても、その根本の考が違ふ。境遇は何處に居ても宜い、此處に斯うやつて居ても、自分の心の中には佛に成るやうな本性があるのだから、その心はその方に向きさへすれば、今日のこの時間から凡夫を離れて、佛に成り得るところの道が開かれて行く、一足飛びにはならないけれども、だん／＼佛に近づいて行く。斯ういふのでありまして、同じ成佛といふ教に於てもその説き方なり、趣意が非常に違ふことを考へなければならぬ。

それが即身成佛といふことであります。これは前に申したと思ひますが、即ち離れないといふこと、この身を離れずして今此處で佛に成る、別の世界へいふ道が開かれて行く、斯ういふ事が教へられて居るのであります。

それは心の根本が、この佛の教に依つて今まで迷ひの方に向いて居たのが覺りの方に向いて行く、それが一念三千といふことであります。吾々心の中に、今は凡夫の生活をして居つても佛に成るべき本性が具はつて居る。斯ういふ事を言ふのであります。これは法華經が本である、天台大師の教の中に於て詳しく説かれて居るのであります。この事が解らなければたゞ成佛々々と言つたところが、それはたゞ言葉で言つて居るだけで、本當の成佛の道といふものは解りはしない。

舉一例諸と申して、龍女が成佛は、末代の女人の成佛往生の道をふみあげたるなるべし。

一つの事を擧げて澤山のものを例する、龍王の女が

行つて佛に成るのではない、この身を離れずして今斯うやつて居る自分が心の持ち方に依つては凡夫の境界をだん／＼離れて佛に近づいて行くこの身を離れずしてこの身を以て佛に近づいて行けるといふことが所謂即身成佛であります。これは法華經でないとなか／＼さういふ事は説いて居ない。その即の字がよく間違ひの本でありまして、即を直ぐにといふ風に思ふ。それはいけない。即といふのは離れないといふだけの意味であります。直ぐにといふことはない、法華經を幾ら讀んでも直ぐには佛に成れないでせう。即といふ字を時々即席とか即時といふ風に使ふものだから、間違へていけない、即席料理といふものはあまり良いものではない。何でも即席、お經を讀んでヒョツと直ぐに佛に成つてしまふ。そんなことはない。即といふのは離れない、この肉身を離れずして此處で佛に成る、佛に成るといふことは迷ひを離れて覺りが開けることであります。さう

成佛したといふことは一つの事であるが、決して一つではない、皆さうだ、どんな人であつても心の根本が佛の教と一致することになれば、皆佛に近くなれる。だから龍女の成佛は末代女人の成佛往生の道を「ふみあけて」その道を開いて、誰でも本當に誠心をもつて佛の教を求めて行きさへすれば、皆この通り今の凡夫の境界を離れて佛の境界に近づいて行けるといふことを教へられたものである。

儒家の孝養は今生に限る。未來の父母を扶けざれば、外家の聖賢は有名無實也。

そこで初めて親に對して孝行が出来る。吾々が親のことを考へて、さうして自分の本當の信心を擧むならば、その自分の信心の力に依つて親を救ふ道に入れることも出来る、これが本當の孝行だ。「儒家」孔子の教で言ふ親孝行といふものは、たゞこの世だけのことである。儒教に於ては後の世といふことを

言はないから、この世に於てだけであつて、親が死んだ後で親孝行するといふことは出来ない。儒教では生きて居る間だけであります、死ぬまでの話で、死んでしまへば別であります。ところが佛教の方では、人間の身は死んでも心は死なないといふことを教へてあるから、今私が亡くなった親を思ふ時に、私の心に亡くなった親の心がやはり生きて居るのだから通ひ合ふ。斯ういふことを考へられる。それだから親の死んだ後で親孝行が出来るといふことは、これは佛教以外には無い、儒教には無い。その事を日蓮上人は屢々言つて居らつしやる。私なども佛教を信じ始めた頃には、あまりそんな事に對して能く考へませぬでしたけれども、この頃になつてモウ自分も年を取つて参りましたし、今は両親は世の中にありませぬ。又私は不幸なものでありまして、自分の生れた時には両親とも親を有つて居りませぬ。私は父方も母方も、祖父さん祖母さんといふも

の一人も居ない。その人々がどんな人であつたか知らない、或はさういふ祖父さん祖母さんは佛の教を相當に信じて居た人であつたかも知れないが、或は又あまり信仰のしつかりして居なかつた人であつたかも知れないのであります。私の両親は、有難い事には、死ぬる際には私と同じやうに覺束ないながらにも法華經を讀んで呉れましたから、マア私は安心でありますけれども、私の祖父さん祖母さんになると少しも判らない。この頃私はマア覺束ないなりにもどうやら斯うして法華經を讀んだり、日蓮上人の御遺文などを讀んで居りますが、祖父さん祖母さんはどうなんだらうと思ふと、随分心配になる。併し今の私は心配はしない、甚だ僧越千萬なことを言ふやうですが、私は少しも心配しない。何故ならば祖父さん祖母さんの身は私の眼には見えなけれども、生き残つて居る私が祖父さん祖母さんのことを本當に考へたら、この私の心が祖父

さん祖母さんの心にも通ずるだらう、斯う思ひさへすれば、生き残つた孫である私が、一生懸命に信心を勵んで、法華經が世に弘まることに聊かなりともお手助けするならば、この功德は祖父さん祖母さんに譲り與へられるだらう。私の祖父さん祖母さんが縦ひ本當の信仰をして居なくても、その孫である私の信心が幾らか譲り與へられて、後の世は悪い所へは生れぬだらう。マア甚だ僧越千萬な話でありますか、この頃さう思ふ、さうすると非常に氣が樂になる。

それが佛教で言ふ回向といふ思想であります。回向といふのは自分の功德を自分の大事と思ふ人に譲り與へるといふ思想であります。この思想がなければ随分心配なことであります。祖父さん、祖母さんはどうして居つたか、曾祖父さん、曾祖母さんは何をして居つたか、少しも判らない。何處へ行つて居るのだから判らないといふのでは、これは甚だ心細い

話である。併ながら佛教に於てはこの事を教へられて、心と心とはいつても通ひ合ふものである、自分のこの身に正しき信仰を勵むことになれば、亡き人も救ふことが出来る、而あたり會はなかつた祖先の靈も救ふことが出来るといふことが教へられて居るから、本當に佛教の信心をすることがそれが本當の孝行だ、この世だけの孝行ではない、亡き人に對しても孝行になる譯でせう。斯うあつて初めて吾々は本當に信心を勵む甲斐がある譯であります。

その事をこゝに言つてあります。儒家の孝道はこの世だけを教へる、儒教で教へる孝養といふものはこの世だけで、後の世に、未來の父母を扶けるといふことは出来ない、だから聖人だ、賢人だと言つてもさういふのは、本當の聖人賢人とは言へないやないか、併し佛教に於て教へる孝行はこの世だけではない、自分の大事と思ふ祖父さん祖母さん、曾祖父さん、曾祖母さんでも扶けることが出来るのだから

ら、これこそ本當に信心の效能があり、信心の力があるのである。斯ういふことが言はれる譯でありませす。

外道は過未を知れども、父母を扶る道なし。佛道こそ父母の後世を扶れば聖賢の名はあるべけれ。

外道即ち婆羅門の方では、過去未來といふことを言ふけれども、併し婆羅門といふものはもと／＼教そのものがしつかりして居ないのだから、縱ひ過去未來を知つたところが、婆羅門教の教に依つて亡くなつた先祖や親達を扶けることは出来ない。佛教は本當の正しい信仰を説いて、さうして亡くなつた人の心と、生きて居る者の心との通ひ合ふといふことが考へられるのだから、こゝに至つて初めて親にも孝行を盡すことが出来るのであります。

こゝでチヨット申して置きたいのは、孝行といふ

の事を能く説かれて居ります。こゝの所では親子だけのことを説いて居られますが、それはモウ人間が親となり子となり、夫となり妻となるといふことはこの世だけの縁ではない。佛教の方から言へば、前の前の世からの縁が熟して、この世で親子となり、夫婦となり、兄弟となつたのだから、一人の者が本當に信心を勵むことに依つて、自分の親でも子でも、夫でも妻でも、兄でも弟でも、皆救ふことが出来る、斯ういふ事を信じなければならぬのであります。さういふ意味に於て佛教の信仰といふものは非常に大きな力になり、又非常に大きな喜びになる譯であります。若しそんな不幸な目に會はれた方があつたならば、能くそこを考へて、自分一人の信仰の力に依つて總ての人を救ふことが出来るのだ。誠心を有つて居たら、その心と心とが必ず感應するものだといふことを信じて行けば、自分一人の信仰を勵むといふことが、非常な力になり、非常な喜びにな

ことを日蓮上人が屢々仰しやるのは、孝行だけを言つて居るのではない、親子といふものを代表として、夫婦なり兄弟なり一切の人の事をこれで解釋しようといふのであります。そこに誤解があつてはならない。親子だけのことではない。苟くも一つの家族となつて、親となり子となり、夫となり妻となり、兄となり弟となるといふことは、この世だけの縁ではないのでありますから、私が本當に信仰を勵むことが出来るならば、私の親を救ふことが出来るばかりでなく、私の兄弟として生れた者も救ふことが出来る、私の子として生れた者も救ふことが出来る。夫婦でもその通り、夫はその死んだ妻を、妻はその死んだ夫を救ふことが出来る。これに回向することが出来るといふことを、親子といふ言葉に依つて代表的に説かれて居るのでありますから、そこはどうかただ文字通りに取らないやうにして貰はなければならぬ。これは御書の全體を讀んで見ますとそ

るのであります。私も兩親を亡くして居り、又兄弟なども二人も三人も死んで居りますから、さういふやうなことを考へて見ても、自分一人の信心を輕しくしてはならぬといふことを、私も大分年を取つて來たものだからしほらしい氣になつたのか知れませぬが、この頃になつて熟々考へて居る譯であります。

併ながらその他の者を救はうといふには、自分が救はれないで人を救ふことは出来ない筈であります。自分が迷つて居て人を覺らせようと言つても無理であります。

然れども法華經已前等の大小乗の經宗は、自身の得道猶かなひがたし。何に況や父母をや。但文のみありて義なし。今法華經の時こそ女人成佛の時、悲母の成佛も顯れ。達多の惡人成佛の時慈父の成

佛も顯るれ。此經は内典の孝經也。二箇の諫め了んぬ。

ところで法華經以前の教といふものは、方便の教でありますから、法華經以前の教だけを習つたのでは、自分が本當の覺りは得られない、自分が本當の覺りが得られなければ、自分の亡くなつた親を救ふとか、自分の亡くなつた兄弟を救はうと言つてもそれは出来ないことです。そこで自分の信仰を勵むといふことが何しろ大事だから、その信仰の土臺として法華經のやうな、本當の教を學ばなければならぬ。斯ういふことになる譯であります。「但文のみありて義なし」文章の上では自分が信心すれば親を救ふとか、祖先を救ふとかいふことは言つてあるけれども、その本當の意味から言ふとそれは當てにならぬ。今法華經の時こそは、女人成佛のことも現れて居る、だから龍女が成佛したといふことから見る

する道がチャンと説かれて居るのだから、孔子の説かれた孝經ばかりが孝經ではない、孔子の孝經はこの世に於ける孝行のみを説かれた、佛教の中の法華經といふものは、來世に亘つての孝行を説いて居るのだから、これこそ本當に孝行の道を教へたものである。さう言はなければならぬ。

これで以て提婆品の中の二つの事が了つた。

巴上五箇の風詔に驚きて、勸持品の弘經あり。明鏡の經文を出して當世の禪律、念佛者、並びに諸檀那の謗法をしらしめん。

前の寶塔品の中に三度佛様が末法の世に出て法華經を弘めろと仰しやつたのと、提婆品の中の惡人成佛、女人成佛の二つ、都合この五つの事を能く考へて見ると、世の中がだん／＼險惡になつて行けば行くほど法華經を弘める必要があることを感じます。

と、自分の母親も自分が救ひ上げて上げることが出来るといふ見當が附く、女でも佛に成れるのだからさうすれば、自分の母親も佛にして上げることが出来るぢやないか、生き残つた子供の自分が信心をしつかり勵むならば、自分の母親もキツと佛に成るだらう。斯ういふことが判る。

又提婆達多のやうな惡人でも佛に成れるといふのだから、自分の父親が縦ひ生きて居る間に一度も佛に掌を合はせなくても、生き残つた子供の自分が信心すれば、その信心の功德がその父親に報うて、必ず救はれて遂には佛の境界にも行くことが出来る。斯ういふことが判る。

さう考へて見ると提婆品の惡人成佛、女人成佛といふことが説かれてあるのが非常に有難いことになつて来る。總ての人に取つて何より大事なことになる。

この經は内典の孝經と同じだ。何故なら親を佛に

それで五つの箇條は了つて居ります。

そこで斯ういふやうに佛様が一生懸命に末法の世の者のことを考へになつて、だん／＼世が末になつて來ると世間が險惡になり、人の心が難かしくなつて來るから、何とかこの法華經のやうな尊い教を世に弘めなければならぬと仰しやられるその佛様のお言葉に、成程と皆が感激して、さうしてその次の勸持品に至つて大勢の菩薩達が是非自分達が身を捨て、末法の世にこの教を弘めさせようと申上げた。

そこを能く考へなければいけない。要するに自分達が身を捨て、教を世の中に弘めようといふ心持になつたのは、佛の恩に感激したればこそであります。吾々は凡夫だから動ともすれば自分の勝手を考へ勝てあります。佛がこれ程までに末の世の者を案じて教をお遣し下さつたのだといふこの有難い心持に感激すると、吾々凡夫と雖も、自分の利を捨てて、それでは一つの命に懸けてもこの教を弘めさせう

といふ心持になる譯であります。だから恩に感ずるといふことがなければ人間といふものは奮發しない。そこをしつかり考へなければいけないといふのであります。

日蓮上人も始終その事を言つて居らつしやる、自分は佛の恩に感じて居るのだ、自分が長い間研究して法華經が一番尊い經だといふことを知つて居る。それと共に法華經を信ずれば、今は凡夫であるけれども、未來に於ては凡夫の境界を離れることが出来るといふことを信じて、信ずると同時に佛の恩が有難くて堪まらない。この佛恩に何とかして報ひたい、恩を知つてその恩に報ひたいと思ふと、どんな迫害が來ても、そんな迫害などは蹴飛ばしてしまつてこの教を弘める爲に力を盡さずには居られない。斯ういふ事を言つて居られるのであります。恩に感ずるといふことなしには決して善い行爲は出來ない。この事は始終言つて居られることでもあります。

が、今の所でもその事を強く言つて居られるのであります。

そこでその事を當世の禪とか律とかいふものは能く考へないで、どうも釋迦様の御本意に叶はないやうな教を自分で信じたたり、世の中に弘めたりしてそれで平氣で居るのであるが、この所をしつかりと考へなければならぬ。

日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頭刎られぬ。此は魂魄佐土の國にいたりて、返年の二月雪中に書して有縁の弟子へ贈れば、をそろしくて怕からず。見ん人何にをぢぬらむ。是は釋迦多寶十方の諸佛の、未來日本國當世をうつし給ふ明鏡也。記念とも見るべし。

日蓮といふものは去年の九月十二日夜半を過ぎて曉になる頃に、龍口で頸を刎ねられてしまつた。つま

り生れ更つたといふのです。自分は龍口で頸を刎られてしまつて、その魂魄だけがこの佐渡の國に渡つて來て、さうして翌年の二月に雪の中で斯ういふ事を書き記して居るのだ。

この生れ更つたといふ思想はどういふ思想かといふと、法華經の中には法華經を弘めるに就ての三つの豫言があります。

一、廣宣流布

二、諸難集來

三、諸天加護

その一つは骨折つて弘めれば、法華經が末の世に必ず弘まるぞといふ廣宣流布の豫言であります。モウ一つは、結局は弘まるのだが、併ながらその法華經の弘まることに魁けする者の身邊には有ゆる迫害が來るといふ諸難集來の豫言。つまり第一は廣宣流布、努力は無駄ではない、キツと弘まるといふ豫言、第二は諸難集來、法華經を弘める者には必ずいろいろ

ろな難が集つて來る。罵られたり、誹られたり、石をぶつけられたり、杖で打たれたり、鳥流しに遭つたり、頸を斬られさうになつたりいろ／＼な事がある。斯ういふ豫言です。いま一つはそれでも屈しないでやると諸天が加護する、天がこれを護つてその努力は無駄にならぬ、この三つの豫言がある、いろいろな事が出て居りますが、纏めて見るとこの三つであります。この法華經は後の世にキツと弘まる、併しその弘めるに就いては骨が折れて、一身に諸難が集まる。それでも屈しないでやれば天が護るぞ。これが法華經全體を貫いて居る三つの豫言であります。さうしてその三つの豫言が自分の一身に現れたならば、その人は本當にこれは末の世に至つて法華經を弘める人と自信して宜い人だ。

ところが日蓮上人は鎌倉で十九年間教をお弘めになつた時に、これが實現した、諸難が集つた、勸持品にある通り一つも違はず現れた、それから天が加

護するといふことも現れた、龍口で頸を斬られさうになつても、頸が斬られなくて佐渡へ流された、途中どんな目に遭ふかと思つたところがやはり無事に佐渡へ着いた、だから諸難が集まるといふ豫言もその時に實現したし、天が守護するといふ豫言も實現したのだから、して見れば自分の努力は無駄ではなくて、法華經が廣宣流布するといふことも信じて宜い、これはまだ現れはしないけれども、この三つの豫言が二つまで僅か十八九年の間に現れたのだから、モウ一つの豫言も信じて宜いだらう、龍口で頸斬られさうになつても斬られないで佐渡へ流された、これで日蓮上人の一生の一段落が付き、さうして法華經の行者であるといふことも事實に依つて證據立てられた譯であるから、これからは更に新しき日蓮となつて新しき確信を以て、法華經を後の世に遺さうといふその仕事に掛る譯であります。

ですから日蓮といふものは、あれで一段落だ、今を傳へる爲に力を盡さうと斯う決心した。その決心に基いて斯ういふ事を書いて、自分の弟子や檀那に信心をしつかりしろといふことを促すのだ、斯ういふのであります。

この所は日蓮上人の心境をその儘いはれた。であるから自分に縁の有る弟子にこの事を書いて贈るのであるといふ。「をそろしくて怕からず」といふのは面白い、一方から言へば日蓮といふものは怕しき人で、どんな苦しい目に遭つても何とも思はないやうな怕しい人だと思ふけれども、その日蓮が實は弟子檀那を可愛い者だと思つて、その弟子檀那にこれから信心を勧めと言つてやるのだから、そこを考へると怕しいどころではない、懐しいだらう。一方から言へば日蓮といふものは怕しい人だが、一方から言ふと懐しい人だ、有難い人だ。斯う思ふに違ひないのであります。

まで十九年近く、身を以て法華經の中に豫言されたことが、實際現れるか現れないか試みたのだが、その通りだつた。これで一段落だ。これからは自分一人が信するばかりではない、誰が見ても日蓮が法華經を弘める者であるといふことは疑ひがないのだから、今度は一つ生れ更つた者になつてこの法華經を末の末の世まで傳へる爲の土臺を作らう。斯ういふことであります。

それを日蓮は去年龍口で頸を斬られたといふ、頸を斬られたのではないが、一段落附いたことであります。今までの十九年の生活が一段落附いて、これからは吾も人も共に日蓮を法華經を弘める者だ、法華經の行者だと信じなければならぬといふことになつたのである。そこで佐渡へ来た、さアこれから又一仕事だ、今までは身を以て試みたところが、モウ自分の身に一切の豫言が實現されたのだから、これからは末の世に傳へるのだ、後の後の世までこの教

そこで「見ん人何にをぢぬらむ」弟子檀那は解るだらうけれども、世間の一般の人がこんなものを見たら、どうも日蓮といふ奴はどこ迄も圖太い奴だらうと思つてびつくりするだらう。それは日蓮は佐渡へ流されて意氣銷沈して小さくなつて居るだらうと思つたところが、斯ういふ事を書くかと思つて、世間の一般の人はどれ程か怕しく思ふだらう。斯ういふことを、マア世の中の人の心持を察して書かれたものであります。

これはナニモ自分一人が言ふのではない。釋迦多寶十方の佛がこの教を眞實だと仰しやつた。その佛様の心持に基いて言ふのだから、日蓮の言ふことだと思つてはいけない。これは末の世の日本國の將來を映す鏡だと思へ、若し自分が此處で死んでも、この教は遺る、記念と見て宜いと言はれる。日蓮上人はいつでも死ぬ覺悟をして居られた。生きて居られる間は一日でも生きて居て教を弘める。併しいつ

死んでも、斯ういふ事を書き遺して居るから、これに依つて皆が信心を勵んだら宜い、斯ういふのでありますから、今自分が死んでも少しも惜しくはない。これだけ言ひ遺して置きさへすれば、これを記念として見て、後の者が共に信心を勵めば宜しいといふのであります。

この命を惜まないといふことは急いで死ぬといふことではない、そこを間違へてはいけない。命は惜まない、だから死ぬべき時が来ればいつでも死ぬ、併し無理に死ぬには及ばない。一日でも長く生きて居て盡した方が宜いに相違はない。日蓮上人の態度はいつでもそれでありませう。命を捨てるのが教を弘める爲に役に立つなら、いつでも死ぬけれども、併し無理に死ぬには及ばないのだから、生きて居るならば、一日でも餘計生きて居て世の中に教を説いた方が宜い、斯ういふので、死生といふことを超越して居るのであります。そこに非常に尊い所が

死生の事固より決定して候へば今更死を急ぎ申さず候、其邊に於て御心配御無用に候
 と言つて居る、實に偉い、生きる死ぬるナンといふことは、もうチャンと覺悟して居るから決して急いで死にはしない、死ぬべき時が来れば、いつでも死ぬが、無理に死にはしないから心配するなど言つて居る、これには板垣退助一言もない。一たび本當に心の土臺がしつかり据ればそれであります。決して死を急ぐには及ばない、けれども死を避けるにも及ばない、死ぬべき時が来ればいつでも死ぬる。だからいつでも自分の言ふ事は記念と思へ、斯ういふのであります。マア吾々は日蓮上人などはまるで段の違ふつまらぬ者でありますが、どうかさうありたいと思ふ。一切の言行が記念と思はれる、私が今晩此處で今言ふのが記念だ、斯う思はれるやうな生活をして居つたら、實に生甲斐のあることだと思ひます。

俳諧師芭蕉が大阪で病氣をして死にました、その時弟子が辭世を一つ詠んで呉れと頼んだ。昔から俳諧の上手な人は皆死に際に辭世を詠んで居りま

ある。だから日蓮上人は逃げられる時にはいつでも逃げる、小松原の法難の時でも逃げて居る、こんな所で死んでも仕様がなない、成べく生きて居る方が宜い、けれども死ななければならぬ時にはいつでも死ぬる、つまり生死を離れて居る覺悟であります。いつでも死ぬるぞ喧嘩なら持つて来いといふのは、これは危い、喧嘩になつたらキツと逃げる奴であります。死ぬるとか生きるとかを離れて居るから、死ぬべき時にはいつでも死ぬ、ナニモ無理には死なないといふことが出来るのであります。

西郷隆盛が明治の初めに征韓論を唱へて、これが容れられないで薩摩に歸つた時に、皆心配した、どうもあれ程の勢ひで征韓論を唱へて居たのだから、その意見が容れられないとなつたら、どんな事をするかも知れないといふので、板垣退助が非常に心配して、どうぞ緩くり考へて輕卒つた事をして呉れるなといふ手紙をやつた。それに對して西郷隆盛が返事をして

す。そこで愈々先生の病氣が難かしいといふので、門弟が何か辭世を一句詠んで遺して置いて下さいと言つたら、芭蕉が「平生詠みすてしもの、悉く辭世だ、いつ死んでも宜いと思つて居るのだから、不斷詠んで居るのが辭世だ、今更新しく辭世など詠むには及ばない」と言つたさうであります。實に偉いものであります。今夜死んでも、今夜此處で言つたのが遺言だ、明日の朝死んだら明日の朝までと言つたのが遺言だ、斯う思へといふやうに、いつでも後に遺して恥かしくないやうな言葉と言ひ、いつでも後で遺して恥かしくないやうな行ひをするといふことであつて、初めて本當に人間の一生といふものが意味が有るでせう。

だから日蓮上人も「記念とも見るべし」と言つて居る、今此處で死んだらこれが記念になる、自分の言ふ事は皆佛の心持に叶ふことであるから、この儘死んでも遺憾はない、併し生きて居られれば生きて居て命に懸けて教を弘めよう。斯う仰しやつたのであります。この態度は吾々共の仰いで手本とすべきことだらうと思ひます。(二十四講了)

本尊論破邪篇 (三)

河合 陟 明

自覺は實在の根本原理であり 而て眞の自覺に達するには 意志の世界 行爲の世界を經過せねばならぬ。自覺によつて自己があり 自由があり 自己の意志といふものがあり、また自己の創造性があり 従つて人格とその無限なる尊嚴と權威といふものがあるのである。或は自覺の根柢には 自愛的感情といふものが潜んでゐるであらう、而てそれが肯定せらるべきや否定せらるべきや 果して自覺的なりや盲目的なりやといふことは、循環論證の如くして而も一個の根本的問題であるが、何れにせよ哲學的立場に立つて 實在を明かにするには 自覺の事實よりして出發せねばならぬ。而て單に形式的のみでなく 眞に具體的内容ある自覺 即ち眞實在の認識に到達せんがためには 意志こそ即ち充足理由

の原理である。意志の發展 意志の實現は 因果の形式をなす、即ち菩薩行となる、いはゆる因果は觀念と實在との橋梁であるといふのも この意味でなければならぬ。こゝに我々の存在 或はいはゆる歴史なるものの實在性があり、また意志の無限なる自己充足の究極における いはゆる超歴史的なる絶對者そのものの現實性がある。同時に他面よりしてこれを見れば、我々の人生は常に自己自身を超越せんとするの要求を有し、而てかくの如き生の高次の超越として 絶對の覺者の超越性 尊嚴性といふものが成立つのである。シュライエルマツヘルが神を高次の實在といひ、現代の危機神學が 昂然として神の超越的尊嚴性を主張するのも、かくの如き意味に開顯せられねばならぬ。存在の論據としては 萬有

いはゆる三千の諸法はひとしく實在性を有し 現實であり また現象であり、十因緣法所成の衆生 即ち十如是因果律によつて現存在する實相としての十界であるのであるが、價値の差別に於ては 絶對の自覺者 即ち佛界は全く超越的である。而て價値的超越性といふことは その實在性を規定するものである。一般に價値に相應して スピノザのいはゆる實在の程度といふものが考へられるのである。

實在は自覺的體系の發展であり、自覺への意志といふことが 實在の根本動向であり要求であるといふことは、人間は常に 迷ひつゝ善を求むるものである。プラトーンが善のイデアを以て最高の實在としたことは深い意味がある。善惡は實に人生の根本的態度であり 價値判斷であるが、これを從淺至深してその由來を求むれば、人間の最も平凡なる状態即ち果報として 感情的には苦樂相對し、その苦樂の由來は意志的善惡に基き、善惡は更に智的に迷悟の二方向に由來し、而て迷悟の根本的原理 或は能力は 無明と法性に根據するのである。この兩者の

關係が 東西古今を通じて 凡ての人智の問題であるのである。

人智の出發が 或は外に眺め 或は内に省みて、或は驚き 或は感嘆するところから始まるといふことは 既に述べたところであるが、東洋の古代と西洋の近世に於て 懷疑といふことを根本的に徹底して 實在を把握せんとしたる代表的の二人がある。一は「我考ふ 故に我在り」といふ言葉を以て出發した 近世哲學の始祖デカルトであり、一は人間の生老病死を諦觀して 無上の勝處を求め 絶對の自由 解脱 涅槃 大自覺位に到達されたる 佛陀釋尊である。

ポールダールケは 釋尊を以て懷疑の典型となし 果敢に根本的に人生に對する懷疑を實行し得た人と論じてゐる。デカルトの態度が 西洋哲學史上に於て人生或は責任に關する哲學的探求の一の根本典型と見らるゝに對し、釋尊は既に古代印度文化の爛熟期に出で、夙にかくの如き根本的立場に立ち、しかもかくの如き大いなる懷疑の後には 竟に絶對の覺に到達されたる大事實をも忘れてはならぬ

而て釋尊の懷疑と反省の對象は 人生の迷を照破するにあつたのであり、この迷妄なる人生の由來と結果を 惑業苦の三道として諦觀し、この惑業を斷破して苦果を解脱するにあつたのである。いはゆる三道の輪廻は生死の本法であり、これを更に審思して十二緣起の順逆兩觀となり、かくて 流轉の輪廻界と その解脱界との因果を大觀して 苦集滅道四諦の大觀となり、苦 空 無常 無我 寂滅涅槃の五門 ないし三法印の教説となるに至つたのである。

かくの如きいはゆる原始佛教の教義より しいに發展して實在論的いはゆる實相論的方向に於ては部派佛教に まづこれを組織化し諸法の法相を固定して 或は三世實有法體恒有の一切有的思想となり、更に我空法有より 人法二空の傾向に進まんとし、また色心互薰 種子薰習等に對する種々の萌芽的思想を出だし、原始的無我説に根據しつゝも いはゆる六識以上に 自我の實體 生命の實在性を探究して 諸種の根本識を見出すに至り、特に佛陀論的方向に於て その本體の不滅性に關する欣求探求と相應して 吾人の本質に對する心性本淨の思想が

著しく表面に露れるに至つた。而て佛教の教義が他の印度傳來の諸宗教哲學と 交互に深き影響を及ぼしつゝ、數世紀を重ねるうちに、諸種の大乗經典は鬱然として産出せられ、しかもそれらは殆ど悉く壯大華麗なる文學的藝術的表現を以て 深遠なる宗教・哲學および道德的思想を現したのである。かゝる大乘思想をまづ智度無極なる般若的空の立場より整理し 小乗の法相決定性を打破して、一面に於ては釋尊に次で再び しかもまた佛教教理史上に於て 代表的なる懷疑哲學の樹立とまで思はるゝほど、凡ての情執を空し 實在を空し 一切諸法を否定し遣蕩したものが 龍樹の中觀佛教であり、他面に於ては この空に即して一切諸法を肯定し建立して實在の積極性を表したものが 大智度論等に現れたるところの思想であつて、この否定と肯定の二面に於て、龍樹は一切の存在の固定的實體化を排して 直ちに融通無碍なる本體界に突入し 他面を以て大乘の本體空の立場より 直ちに現象界を直觀肯定して この二面の消息裡に解脱涅槃を見出したのである。而てこゝに眞俗二諦と四悉檀の運用を以て

小乗を破り外道を破り 當時の一切の思想を縱横に批判すると共にこれをまた吞吐綜合して 釋尊の佛教を新たなる歴史的勢力と發展に齎したのである。凡そ思想發展の徑路に於て その思想が固定的有に墮したとき、これを打ち破つて直ちに無限なる本體界の直觀に躍入せんとするは 思想の自然なる趨向であり、主觀的にいへば、我々の生命および人格の一の根本要求である。

龍樹の思想はいはゆる中觀佛教として印度佛教における代表的二宗の先驅となつたが、次で宛もヘーゲルのいはゆる歴史の辯證法的發展の如く、かゝる中道空觀に對して、再び我々の生命或は存在の本體と現象 その因果的由來に關して 綿密なる論理的規定を求めて起つたものが 無著・世親の唯識佛教である。これは部派佛教に於て發展した諸種の心識論を 更に総合的に開展したものといつてよい。しかも龍樹の思想が未だ六識以上に出でなかつたのに對して、こゝには諸識の根本として阿賴耶識思想を生み出すに至り、そこに有漏と無漏との兩界に亘る 本有と新薰の種子と現行を以て 即ち本體的な

る一大叢識の發現を以て 宇宙の現象界を説明せんとしたものであり、而て流轉界の由來を明かにすることは 歸つて解脱界への道を明かにする所以である。それは宛も原始佛教に於て 苦集二諦の現實的諦觀が 滅道二諦による理想界への指標となると同様である。中觀と唯識の兩教系は 一見宛も空有相反するが如くであるが、後者はやはり前者の精神を繼いで、これを更にその未到の領域に 同時に特色ある思想型態を以て 發展せしめたものに外ならぬ。而てこの二系統は後に更に 支那における代表的なる學的組織の二大宗學に影響してゐるのである、即ち兩者はこゝに漸く實相論系と緣起論系として 印度に發生しつゝ、その成熟を しいに歴史的順序を逐うて 支那の天台と華嚴の二家に委ねるに至つたのである。

唯識教學は 迷妄流轉の現象界と 本體解脱の價值的理想界とに關して、前者に就ては阿賴耶識を立て、説明原理としたが、その阿賴耶識は個人的に止まつて未だ普遍的に至らず、いはゆる各自唯識 半頭唯識 種子緣起 有爲緣起として、絶對唯心論的

統一に達せず 萬人に普遍妥當する一元的原理に來らず、更にその價値的本體としての眞如は、いはゆる凝然として不作諸法なりと説いて、また未だ事理融即 理智不二 體象不離の旨致に達せず、かくて現實と理想の何れに互つても、思想の又は知識の最終統一としての哲學的要求を滿たすに充分ではないのである。

こゝに於て更に一轉進して、かゝる個別的唯心の據つて立つべき 一層深い實在としての普遍的根柢を明かにすべく、絕對の一心を以て衆生ないし萬有の本體となし、不偽不改、常住無異の本質を意味するところの 眞如無爲の一理よりして、一面には有爲迷妄の現象界の發現と 更に價値的本體界への還元とを明かにすべく、眞如と無明とこの眞妄和合の阿頼耶識との 三者の關係を論じて、まづ衆生の一心を絕對的に考察して、心眞如門を論じ、これに離言不可説の直證と 概念的規定による把握との二途を明し、次でこの眞如に根本無明の加はるによつて生ずる心生滅門に於て、形式的には不變と隨縁の二面の徳或は作用を眞如に論じ、本質内容としては衆

淨二界に隨熏轉動する 價値反價値の二方向を開いて、不覺を縁とする始本二覺の根本關係を明かにし、その始覺的修行による還淨作用によつて 無明の動相を寂靜の心源に還し、そこに眞如常恒の本體と 如來藏無量の徳性と 周遍法界の力用と、いはゆる體相用三大の義を開示して 衆生の一心が即大乘なることを究竟説明したのが、即ち馬鳴の大乘起信論の教義である。

起信論における 眞如一理と萬有諸法との關係を更に一轉進して、たゞに理事無碍なるのみならず直ちに事の現象界中における事々無碍 十重無盡の縁起關係を明かにし、待縁不待縁による同體異體の 體用二面の相即相入を論じて、いはゆる法界の大縁起 或は如來性起の法門と誇稱する 萬有相關諸法即絕對の妙旨を開發したものが 賢首より清凉等に至る華嚴教學であり、華嚴本經そのものにて於ては、かゝる理論と相俟つて 信住行向地等 大始覺行 菩薩行における恒沙無量の佛法を 開展示教せられてゐるのである。華嚴學者は 唯識 華嚴の二家を比較して 相性二宗と稱し、起信論は妄本を語

り 圓覺經は淨源を明し 華嚴經は稱性の極談を示すと論じてゐる。然しながら起信 華嚴等の教系はその教理精緻なるが如くして、しかも未だ諸法無盡の縁起的相關關係を語るのみにして、一種の外面的説明に止まり、未だ萬有諸法の 具體的内容を示さず、また従つて縁起の因由する根本實在、むしろ縁起的範疇の妥當する生命の本質は明かならず、更に縁起の法則そのものに就ても、未だ半面の眞理を明したに過ぎない。況んや宇宙の眞如の絕對實在と個性を完成して宇宙を體驗包攝したる人格的佛陀との同異關係、殊にその區別、或は先驗的絕對と經驗的絕對等の關係は、猶ほ論理的明晰を缺いてゐるのである。彼等は自ら稱性の極談と誇稱するも、奪つて言はゞ畢竟未だ却つて一種の相宗たるの圈内を出でないのである。

こゝに於て、歴史的順序ではないが論理的順序に従つて論ずるとき、かゝる一心眞如法界の内容を具體的に開示して、理體と事造にわたる人格的十界の本具實在性を明し、かくて眞如の意義に關して二面を分ち、一面に於てその非色非心 非迷非悟 ない

し染淨熔融の超對立的 一元的 絕對的根柢として は 十界一具と説き、他面に於てその純價値的根源としては、たゞ佛界性 如來藏 理本覺 法身と説き、而て宇宙法界と個性人格との關係に就ては、全を全うして個あり 個々の特殊を普通の根元に於て見るとき一如法界の全體あり、故に菩提論に於て佛陀は無明を斷じて眞如法性を證得するも、その實在性としては非厭離斷九の佛にして、本有不改の十界性は恒常に變らず、かくて佛陀もまた十界互具なるが故に、性惡不斷 修惡不斷にして、十界の受用應現自在なるを明し、即ち佛陀とは十界互具の實を顯し得たるものを名づけ、これを顯し得ざるものを凡夫といふと示し、更にかゝる轉生成佛、ないし一般的に個體人格一々の生命の業縁轉生の生成變化を律する 眞如の普通の法則に關しては、起信論等ないし諸大乘經の法體的解釋に際して軌範的なる 體相用三大の義を發展せしめてこれを整齊組織化したる 十如是因果の必然律を明し、これが十界人格の自由なる意志、自覺への意志に伴ひ、或は制約する宇宙的絕對意志として、いはゆる縁起の根本法則な

ることを示し、而て 多元的無限なる十界個々人格の自覺的自由の意志的内容と 眞如十因縁の宇宙的必然意志の形式との相乗し交渉し 及び表現せらるゝ場面としては、個性と社會性と自然界的國土と即ち主觀的内界より客觀的物心二面の外界に亘る三世間を論じ、かくてこゝに實在の哲理的組織として普遍的形式と具體的生命の内容との 何れに亘つても整齊たる體系を示して、形而上的・宗教的なる法界原理の科學的組織化ともいふべき威容を構成したものが、實に法華經を以て一切經および佛教教理史を統觀したる 天台の一念三千の教義であるのである。

今 佛教史上に於て ひとしく學問的佛教としてしかも同じく支那に於て整理綜合せられ、即ち溯つては印度の中觀・唯識の論理的二學派を承繼し、降つては日本の實踐的諸宗に影響したる いはゆる華天の二家を比較するとき

問ふ、唯心法界 以て妙を談じ、一心法界 以て行を論ずるは、これ如何となすや。答ふ、不可なり、未だこれ十界本具の性相を知らず 唯だこれ唯

て三軌を明さば、一には眞性軌 二には觀照軌 三には資成軌なり、名は三有りと雖もたゞこれ一大乘法なり。

法華經に云く、十方諸かに求むるに更に餘乘なし 唯一佛乘なり」と。一佛乘とは即ち三法を具す亦は第一義諦と名づけ 亦は第一義空と名づけ 亦は如來藏と名づく。この三は定んで三なるにあらざ、三にして一を論ず、一も定んで一なるにあらざ、一にして三を論ず、不可思議なり 並ぶにあらざ 別なるにあらざ 伊字の天目の如し

故に大涅槃經に云く、佛性とは亦一なり、非一なり 一に非ず非一に非ず。亦一とは一切衆生悉く一乘の故に これ第一義諦を語る、非一とは是くの如きの數法の故に これ如來藏を語る、一に非ず非一に非ず數非數の法とは不決定の故に これ第一義空を語る、しかも皆亦と稱するは鄭重なり たゞ是れ一法にして亦三と名づくるのみ、故に單取すべからず、複取すべからず、不縱不横 而三而一なり

圓教の三法を明さば、眞性軌を以て乘體となす、不偽を眞と名づけ不改を性と名づく、即ち正因常住

識唯心の談道に止まつて 幻造無常の空理に歸す (日輝 一念三千論)

予は先に 實在の根本動向を自覺への意志と斷じたが、近世或は現代哲學に於て、實在の本質を目的に意志的・自覺的としてゐることは、佛教に於て既に夙に唱道せられてゐるところである。釋尊が實にこの徹底解決者であつたのである。明と無明 惑業と法性の關係は迷者の問題として、更に佛陀は般若成就者 覺者として、自覺論における因果的系列をなし、而てかゝる覺者の境界に到達せんがためには菩薩行の修道といふ意志の實現 その發展充足を必須とするのである。天台はその佛教體系に於て始め所化の衆生の極迷より 終り能化の佛陀の圓寂に至る 一乘の因果の始終を十門に括して佛教の大綱を組織化してゐるが、それは即ち惑業苦三道の輪廻より始まつて 三徳秘密藏の大涅槃に極まる 類通三法としての一群の系列である。

言ふところの三法とは即ち三軌なり、軌とは軌範に名づく、またこの三法 軌範とすべきのみ、總じにして諸佛の師とする所とは謂く此法なり。一切衆生亦悉く一乘なり 衆生即涅槃の相にしてまた滅すべからず、涅槃即生死にして無滅不生なり、故に大品般若經に云く、この乘不動不出なりとは即ちこの乘なり。觀照とはたゞ眞性を點するに寂而常照 すなはちこれ觀照すなはちこれ第一義空なり。資成とはたゞ眞性法界を點するに諸行を含藏し無量衆具す すなはち如來藏なり。

三法は一異ならざること 如意珠を點する中に光を論じ實を論じ 光と實とは珠と一ならず 珠と異ならず 不縱不横ながら如く、三法も亦是くの如し 亦一なり 亦非一なり 亦一に非ず一に非ざるにも非ず 不可思議の三法なり。

もしこの三法に迷はゞ即ち三障を成ず、一には界内界外塵沙の惑 如來藏を障ふ、二には通別の見思の惑 第一義空を障ふ、三には根本無明 第一義の理を障ふ。

もし塵沙の障に即して無量の法門に達するときは 即ち資成軌顯るゝことを得、もし見思の障に即して第一義空に達するときは 觀照軌顯るゝことを

得、もし無明の障に即して第一義諦に達するときは眞性軌顯るゝことを得、

眞性軌顯るゝことを得ば名づけて法身となし、觀照顯るゝことを得ば名づけて般若となし、資成顯るゝことを得ば名づけて解脱となす。この兩者は即ちこれ定慧莊嚴にして、法身を莊嚴するなり、法身はこれ乘體にして、定慧はこれ衆具なり。

こゝに眞如法性を人格化したる、即ち人格に體現したる、法身の人格性の哲學的根據の一を見ることができる。

文に云く、其の車高廣にして、衆寶莊校す」と、これを圓教の行人所乗の乘にして、薩婆若に到ると名づく、茶を過ぎて字の説くべき無きが如し。

字の説くべき無くんば、亦まさに乘の運らすべきこと無かるべし、もし自行運らし畢らば、乘の義は則ち休むも、もし權化未だ畢らずんば他を運らすこと休まず。故に文に云く、佛は自ら大乘に住したまへり、其の所得の法の如きは、定慧の力をもつて莊嚴せられ、此を以て衆生を度したまふ、とは即ちその義なり。譬へば御者車を運らして達到するに、猶

ほ名づけて車となすが如し、果乗も亦爾かなり、猶ほ名づけて運らすとなす。

また次に何ぞ必ずしも一向に運の義を以て乘を釋せんや。もし眞性の不動不出なるを取るときんば、則ち運に非ず不運に非ず、もし觀照、資成の能動能出なるを取るときんば、則ち名づけて運となす。たゞ動出即不動出、不動出に即して是れ動出なり、用に即して體を論ずるときは、動出これ不動出、體に即して用を論ずるときは、不動出に即して是れ動出、體用は不二而二なるのみ。

圓教は實相を點じて第一義空となす、空を名づけて縱となす、第一義空は即ちこれ實相なり、實相は縱ならず、この空豈縱ならんや。實相を點じて如來藏となす、これを名づけて横となす、如來藏は即ち實相なり、實相は横ならず、この藏豈横ならんや。故に縱を以て思ふべからず、横を以て思ふべからず、故に不可思議の法と名づく、即ちこれ妙なり。たゞ空藏を點じて實相となす、空縱藏横、實相なれど縱横ならざる。たゞ空を點じて如來藏となす、空既に横ならず、藏なんぞ横なることを得ん。如來

藏を點じて空となす、藏既に縱ならず、空なんぞ縱なることを得ん。實相を點じて空藏となす、實相は縱にあらざる横にあらざる、空藏また縱にあらざる横にあらざる、宛轉相即して不可思議なり、故に妙となす。

たゞ如來藏を點じて廣となし、第一義空を點じて高となす、故に其の車高廣なりといふ。如來藏は即ち實相なり、故に其の車廣にあらざる、第一義空は即ち實相なり、故に其の車高にあらざる。たゞ實相これ空、なんぞ高に非ることを得ん。たゞ實相これ如來藏、なんぞ横に非ることを得ん。

また實相を點じて如來藏となす、故に「衆寶もて莊校し、また僕從多くしてこれを侍衛す」と言ふ。實相を點じて第一義空となす、故に「大白牛あり肥壯多力にして行歩平正、其の疾きこと風の如し」と言ふ。智慧染無きを名づけて白となし、能く惑を破す、故に多力と名づく、中道の慧を平正と名づけ、無功用に入る、故に其の疾きこと風の如し。

不思議の三法、共に大車を成ず、豈縱横並別の異りあらんや。始終を明さば、すなはち凡地一念の心に十法界十

種の相性を具するを取つて、三法の始となす。

何となれば十種の相性はたゞこれ三軌なり、如是體は即ち眞性軌なり、如是性は性は以て内に據る即ちこれ觀照軌なり、如是相は相は以て外に據る即ちこれ福德これ資成軌なり、力はこれ了因これ觀照軌、作はこれ萬行精勤即ちこれ資成軌、因はこれ習因觀照に屬し、緣はこれ報因資成に屬し、果はこれ習習果觀照に屬し、報はこれ習報資成に屬し、本末等とは空等は即ち觀照、假等は即ち資成、中等は即ち眞性なり、直ちに一界の十如に就て三軌を論ず。

今はたゞ凡心の一念に即ち皆十法界を具すること、を明す、一一の界悉く煩惱の性相、惡業の性相、苦道の性相あり。

もし無明煩惱の性相あるは即ちこれ智慧觀照の性相なり(これ即ち實在における自覺の原理を表す)、何となれば明に迷ふを以ての故に無明を起す、もし無明を解することは即ちこれ明に於てす、大涅槃經に云く、無明轉ずるを即ち變じて明となす、淨名經に云く、無明は即ちこれ明なりと、まことに知るべし、無明を離れて明あるにあらず、氷これ水なるが如く

水これ氷なるが如し。

また凡夫心の一念に即ち十界を具するに、悉く悪業の性相あり、たゞ惡の性相即ち善の性相なり（これ即ち實在における自由なる意志の原理を表す）惡に由つて善あり、惡を離れては善なし、諸惡を翻へすに即ち善資成なり、竹中に火性あるも未だ即ちこれ火事ならざるが如し、故に有れども焼けず、緣に遇へば事成じ、即ち能く物を燒く、惡は即ち善性なるも未だ即ちこれ事ならず、緣に遇うて事を成じ、即ち能く惡を翻へす、竹に火あり、火出で、還つて竹を燒くが如し、惡中善あり、善成すれば還つて惡を破す、故に即ち惡性相はこれ善性相なり。

凡夫の一念に皆十界の識名色等の苦道の性相なり、この苦道に迷うて生死浩然たり、此はこれ法身に迷ふを苦道となす、苦道を離れて別に法身あるにあらず（これ即ち實在そのものを表す、内中のづから即ち先驗的に善惡迷悟の即ち價值と反價值との二大根本原質を俱存内在するが故に、しかも竟に自覺こそ實在の根本的かつ最終目的なるが故に、迷ひつゝ善を求むるものである）。南に迷うて北

となすが如く、別の南なし、もし生死を悟らば即ちこれ法身なり、故に苦道の性相即ちこれ法身の性相なり。

夫れ心有るものは皆三道の性相あり、即ちこれ三軌の性相なり。故に淨名經に云く、煩惱の儔を如來の種となすとは此の謂なり。

もし如是力、如是作といふは菩提心發するものにして、即ちこれ眞性等の萌動するなり、如是因とは即ちこれ觀照の萌動、如是緣とは即ちこれ資成の萌動なり。

如是果とは觀照の萌動して習因を成ずるに由つて、般若の習果の滿ずるを感得するなり、如是報とは資成の萌動して緣因をなすに由つて、解脫の報果の滿ずるを感得するなり、果報の滿ずるが故に法身も亦滿ず、これを三徳究竟して滿ずるとなし、秘密藏と名づく。

本末等とは、性徳の三軌は冥伏して不縱不横なり、修徳の三軌は彰顯して不縱不横なり、冥伏の如等數等妙等、如等數等妙等を彰顯す、故に等といふなり、亦これ空等假等中等なり。

類通三法とは、前は三軌の法を以て始より以て終に至る、即ちこれ堅に通じて無碍なり、今横に諸法を通じて悉く無碍ならしめんと欲して諸の三法を類通す、何となれば緣に赴いて名異なるも、意を得ば義同じ、ほと十條を通ず、餘は領すべし。

三道（惑業苦）の輪廻は生死の本法なり、故に初となす、もし生死の流れに逆らはんとなすれば、須く三識（第九菴摩羅識、第八阿黎耶識、第七阿陀那識）を解し、三佛性（正因、了因、緣因）を知り、三智慧（實相般若、觀照般若、文字般若）を起し、三菩提心（實相菩提、實智菩提、方便菩提）を發し、三大乘（理乘、隨乘、得乘）を行じ、三身（法身、報身、應身）を證し、三涅槃（性淨涅槃、圓淨涅槃、方便淨涅槃）を成じ、この三寶（佛寶、法寶、僧寶）一切を利益し、化緣盡きて三徳（法身、般若、解脫）に入り、秘密藏に住す。云云

存在、即ち我々の人格、或は宇宙生命における「實在性」の根柢と、その具體的自己實現、自己形成作用として「自覺性」と「意志性」とを、換言すれば「自覺を意志する、實在」「覺りへの修行と

しての我々の人格」の内容および因果的發展を、天台はかくの如くまづ三軌の軌範に整理し、三軌によつて更に廣く諸要義を統一した。起信論における一心二門三大等の教理ないし華嚴唯識三論涅槃等諸宗の義門は、かくして天台の三軌ないし一念三千の哲學に統收され、またこゝにまで發展せねばならぬ所以も、やがて明かとなるであらう。

十二緣起、三法印、四諦、八正道、色心互熏、根本識、心性本淨、中觀無相、唯識無境、一心眞如、法界緣起、一念三千、原始佛教より發展佛教に進んで、その結前生後としての一大分水嶺を形成したる天台卓抜の教觀は、實に佛教史上の偉觀であり壯觀である。彼れが前代幾多の諸學諸宗派を吞吐包容し、また後代に幾多諸宗の教觀を簇生せしめたる所以、また實に偶然でない。而もこれまことに無量佛典の眉目たる、一大佛乘法華の妙意を玄悟し、靈山親承の迹化の菩薩として、分に佛知見を開發し、佛慧の内奥、法界の秘藏を、窺知し洞觀し得たる賜に外ならない。

しかしながら天台の教學も實は未だ十全なるもの

ではない。佛教史上における支那佛教の精華たる華天の二家は、支那および日本に各々實相論と緣起論の二系統として發展し、多大の影響を及ぼしたのであるが、更にこれと相並んで禪、密、戒、淨等、幾多の宗乘簇生の後を承けて、本化別頭の教觀たる日蓮教學に到つて、それら總ての經證、教理、宗學は、悉く折伏批判し、開顯統一せらるゝの思想的コースと運命に達着したのである。

南無妙法蓮華經
昭和十五年癸亥十二月 日蓮大士伊豆流罪 身延入
山の聖辰 叡嶽および愛宕の雄姿を望む 京洛鴨
漕の仙寓に記す

日蓮 聖人 報恩鈔讚講案内

道義已に地に墮ち天日爲に冥く、興亞新秩序の建設も慨念に傾かんとするの時、大聖の實踐窮行を拜するもの忽ち一種微妙の感應を得、物資による困苦缺乏も、高き精神の法悦により知足歡喜の日常となり、大業の基礎ここに堅からん。幸にも本月より左記の通り本部に於て開講の運となる。希くは在京各位、萬障を排除し奮つて御來聽あらんことを。

日時、毎週火曜日晚 六時半—七時、勸行
七時—八時、講話
講師、 小林一郎先生
以上
財團 統一團
法人

大日本帝國の聖業と帝國を環る列強の動向

海軍中將 佐藤 臯 藏

一、帝國の世界的使命と之を遂行する實力の検討

時は正に紀元二千六百年、今我國は東亞新秩序建設の聖業遂行に向つて懸命努力しつゝある。
一 漂へル國ヲ修理固成スル」は我建國の大理想であつて、神武天皇の「天業ヲ恢弘シ天下ニ光宅ス」の詔や、八柱の一字の詔勅は之と同意義である、要は混沌として亂れて居る國々に秩序を建設し、之を整頓して、明るく幸福なる國を造り上げると云ふことであつて、今日我國が遂行しつゝある東亞新秩序の建設なる事業は此の大理想實現の一段階である。
我國は果して此の如き大理想實現の實力を有つて居るであらうか、之に就て我々は先づ根本問題として我國體に就て考へなければならぬ、我國は萬世一系の皇室を戴き世界に冠絶する國體を有する神聖なる國家であつて、國體が絶對に安定し、非常なる底力を有つて居るのであるから之が源泉となつて時に應じて他國人の夢想だもなし得ない非常に偉大なる實力を發揮することゝなるのである。
明治天皇の御製に

いかならむ事にあひてもたわまぬは わがしきしまの大和だましひ

しきしまの大和心を、しきは ことある時ぞあらはれにける

と仰せられた通り、我國は如何なる難關をも突破して、大業を成し遂げ得る雄偉なる素質を有つて居るのである。

今天業恢弘方面のことに關し、最近の出來事であつた吾人の記憶に新なる數個の事例を擧げて見ることにしやう。

徳川幕府の末期頃迄、我國は國を鎮して外國と絶交し、國內は未開蒙昧の狀態にあり、しかも時の權力者は蝸牛角上に相争ひ、秩序は紊亂して混沌たる情勢を呈し、外國の干渉をも誘致せんとするの狀勢に陥りしが、今より七十餘年前明治天皇は位に即かれ、開國進取の國是を採つて國民を指導せられ、國民は其御指導の下に勇躍し、短年月の間に國內の整頓に成功した、即ち先づ國內の秩序を建設したのである。

次は支那と戦つて臺灣を領有して其所に秩序を建設した、領有以來今日に至る迄僅かに四十餘年、其面目今は一新したのは内外共に認むる所であつて、整然たる秩序の下に繁榮を極めて居る現在の臺灣は、其母體であつた亂雜なる支那と較べたならば、兩者は如何に異つて居るかは論議を要しない所である。

次は朝鮮を併合して之を整頓した、立派なる秩序の下に繁榮して居る今日の朝鮮と併合前の混沌たる朝鮮と較べたならば其進歩發達の如何に目醒しいかは何人も驚歎して居る所である。

次に最近に於て支那より滿洲國を切放して王道樂土を造らしめた、滿洲建設僅かに八年其間に於ける秩序の整頓福利の増進産業の勃興等を一瞥し、之を一步越境して眼を支那本國に轉じて其亂雜なる狀勢を省み、滿支兩國の現況を比較せば、何人も其差異の如何に大なるかは驚異せざるを得ないであらう。

前述の如く先づ内地次に臺灣朝鮮滿洲と、近きより遠きに及ぼし、天業を恢弘しつゝ今日行ひつゝあることは東亞全體に通る秩序の建設であつて、此事業は帝國家業最終目的の一過程である、しかもそれは天業恢弘途上の最も重要な任務と申さなければならぬ、此事業たるや其道程に於て非常なる國難を伴ふべきは當然であるが、之を前例に倣ふべからざることを痛感するであらう。

二、聖業遂行と制海權

滿洲事變勃發以來我國民の上下一致各々其職分に恪遵して懸命に努力し、異常の成果を擧げつゝあることは、吾人の現に實感しつゝある所なるが、予は以下少しく帝國海軍は如何なる方面に向つて貢獻したか又海軍の最大任務は奈邊にあるかを略記して見やうと思ふ。

滿洲事變以來海軍陸戰隊が、上海方面や支那沿岸や揚子江珠江等の沿岸各地に於て行ひたる壯烈にして赫々たる武動や海上交通遮斷の艦隊が支那沿岸にて數百浬に亘る海上に於て、酷暑隆暑に耐へ狂瀾怒濤を冒して、沿岸交通遮斷の難澁なる任務を遂行したる功績や、遼江艦隊が揚子江珠江等急湍濁流の中に於て至難にして危險なる掃海事業を行ひ、又屢々陸戰隊を上陸せしめ、水陸より沿岸各地の敵を撃攘して河江開通の任務を全ふしたる重大なる戰績や、海軍航空隊や南北全支に亘つて陸軍の作戦と呼應して敵地を爆撃し、千數百の敵機を撃滅し敵海軍勢力を殲滅したる振古未曾有の偉勳は共に内外の耳目を驚歎せしめたる所にして、國民の記憶に新たなる所である。

然れども國民の或者は此等の業績を以て之を海軍の貢獻したる重なるものと考へ、其貢獻したる主要なる業績は更に〳〵重大なるものあることを知らざる者多きは遺憾に堪えざる所である。

然らば最も重大なるものは何か、それは制海權の確保其事である、我國は海國である戰時に於て作戰區域内に於け

る制海権を確保することは絶對的必要條件であつて、而かもそれは殖民地や邊境地方などの問題ではなく、實に本國心臓部の死活問題である。

若し敵は制海権を保持したものと假定するならば、彼は我沿岸に出沒して我國土を威嚇するであらう、航空母艦等より航空機を放つて我陸上や港灣等を爆撃するであらう、海面を封鎖して海上の交通を遮断するであらう、若し此の如き状態に陥つたならば、我國は疲弊困難戦争を繼續することすら不可能なるのは當然であつて、此の如き状況の下に陸の一兵たりとも海外に送り出すことなどは出来るものでない、然るに滿洲事變支那事變を通じて我國は制海権を確保して居つた賜で、何等妨害を受けることなく海を越えて大軍を敵地に送ることが出来た、充分に之を補給することも出来た、海上を横行調歩して通商貿易を行ふことも出来た、斯くして有利に戦局を進展せしめつゝあるのである、之を再言すれば此の如く有利に戦争を行ひ得たるは其大なる分前を制海権を確保した賜に歸すべく、即ち我有力なる無敵艦隊威力の賜であると申すべきである、國民は篤と此點を承知して置かなければならぬ。

之に對し世間には次の様な質問を有する向がある「支那ニハ役ニ立ツ様ナ海軍ガ無カツタカラ我國ハ勞セスシテ此ノ如キ結果ヲ得タノデアル、即チ支那對手ナラバ大艦隊ハ必要ナイデハナイカ」之れは全くの素人の考へであつて、此の如きことを言ふ人は日清戦争後の三國干渉の悲痛なる教訓を忘れて居るのである。

日清戦争に於て我國は支那に勝つて遼東半島の割譲を受けしが、之に對し露西亞、佛蘭西、獨逸の三ヶ國は之れに干渉し三國の艦隊を九州方面に集中して示威運動を行ひ、遼東半島の還附を強要したのであつた、遼東半島それ自體價值多きのみならず、皇軍の血を以て收め得たる最も重要な戦果なるを以て、之れが喪失は帝國としては實に忍び難き大打撃であつたが、其當時の我艦隊の勢力は至つて微弱であつて、到底彼の三國の聯合艦隊と戦ふ丈の力がなかつた爲、朝野悲憤の裏に涙を流して之に屈從したのであつた、實に達念至極のことであつた。

然るに滿洲事變以來の外國干渉は、三國干渉のものとは全然異つて居る、此度干渉して來たのは三國や五ヶ國でない、時には五十數個國にも及んだことがある、彼等は多數の頭數を集めて盛に脅迫恫喝したのであつたが、此度の干渉は文章や口舌を以てするのであつて三國干渉の時の如く武力を以て我に臨む氣勢を示すに至らなかつた、それは果して何の爲であるか、申す迄もなく我精銳なる艦隊の隠れたる威力に外ならないのである、即ち我艦隊は嚴に武備を整へ、如何なる事變に對しても綽々として待つあるの姿勢にあるに對し、彼等は多數の集團を以てするも之を威壓屈服せしむる自信がなかつたからに外ならぬのである、若し假に我艦隊の勢力微弱にして彼の侮を受けるやうなものであつたならば、彼は如何なる態度を以て我に臨んだであらうかは、充分に察知し得らるゝことであつて、再び三國干渉の轍を履んだであらうことは明瞭であつたと申しても過言でないと思ふのである、要するに我艦隊の威力は「戦ハズシテ人ノ兵ヲ屈スル」と云ふ兵術の原則たる軍備窮極の目的を立派に達成したのである。

以上の如き成果は列國を覺醒せしめたことは當然のことであつて、諸強國殊に英米兩國を刺戟し彼等は海軍の大擴張に向つて異常なる努力を拂つて居ることは周知の事柄である、今其状況を略記して見るならば、英國は今日獨逸との戦争に於て非常なる努力を拂ひつゝあるに拘はらず現在の戦争には其性質上焦眉の急務とも思はれざる主力艦等の建造に對してすら手を緩める様子をなさざる如き、特に米國は年一年海軍擴張案を修正し之を増強し、非常なる熱意を以て之を遂行しつゝある如き、吾人としては一日も偷安を許さざる情勢にあり、併かも米國の我國に對する感情頗る險惡にして、事毎に我を壓迫する態度に出づ、我貿易に對して甚しき差別待遇をなすのみならず最近に於ては通商條約を破棄し、重要物資輸出禁止案すら粗上に載せられて居る如き有様で、我一步退けば彼十歩を進めんとする情勢にあり、實に危険状態にあるものと覺悟せずばならぬ、此の如き情勢の下に於て僅に平和と面目を保ち得るは、我國の實力就中強盛なる海軍力に俟つこと最大なるものと申さねばならぬのである、勿論之に對し海軍の當局者は百方之

れに善處するの策を講じつゝあるが、全國民は協心戮力充分に之れを後援しなければならぬ。

三、國民の覺悟

前項に於ては只簡單に海軍に關する一般のことを申述べたに過ぎないが、陸軍を初め其他各方面に於ても夫々解決を要する幾多の難關が存在するのであつて、殊に思想方面衛生方面經濟方面等に於ては甚大の注意を要するもの多々あるを覺ふるものである、就中思想は總てのものゝ根本をなすものであつて衛生方面や經濟方面等に於ても、専門的技術的方面を除き之れに依て支配せらるゝ部分は多大なるものである。

予は茲に吾々銃後國民が處世の根本方針として夢寐の間にも忘るべからざる教訓に就て申述べることとする、それは明治天皇の賜はりたる御製のことである。

國をおもふみちにふたつはなかりけり 軍の場にたつもたゝぬも

銃後の國民は第一線にある軍人と一つ心になつて、堅固なる精神と健康なる身體の維持養成に努めつゝ、各其職分に恪遵して一生懸命に奮勵努力すべきことを御訓へになつたものと拜察せられるのである。

第一線にある軍人はたつた一つほかない生命を投げ出して、總ゆる艱難缺乏に耐へて一生懸命に軍事に盡瘁しつゝあるのである、其間彼等は勤務が苦しいからとて、もつと楽な仕事をさせて呉れとは申さない報酬が少いからと云つて、もつと手當を増して貰ひたいとは申さない、只もう己を空ふして一意専心、任務遂行の爲職身的努力をなして居るのである、之れに較べると銃後の我々は如何に骨を折らうが、生命までも投出して居らないのであるから其代り、働く方面に於ては第一線の軍人以上に努力する覺悟をしなければならぬ、又日常の消費生活方面に於ても我々は第一線の軍人と較べたならば、まだ一節約をする餘地は多いのである、新しくして節約し得たる所のはつゝましく之

を蓄積して、聖戰目的遂行の爲め御用に立てること銃後國民のつとめとなさなければならぬ。

更に大切なことは、人的物的要素の有效なる利用方法である。之れが爲各々は衛生に注意し、健康の維持増進に努むべきは勿論之れを使用するに當りては勞力の方面に於ても資材の方面に於ても配當安排をつゝしみ苟くも浪費せしむることなく效果的に之れを善用することに工夫を凝らさなければならぬ、予は第一線に對しては絶對の信頼を置くに躊躇しないが、之れに反し銃後に對しては之れと同様の信頼を置くの勇氣を持ち得ないのである、予は實に此く告白するの已むを得ざることを痛嘆するのである。

時局は極めて重大である、我々の任務は至難である、我々一同は聖旨を奉戴し、上下一致軍民協力、各々其職分に應じて粉骨碎身以て難局を打開し、天業の恢弘に向つて勇往邁進しなければならぬ。

時難を救ふもの

磯部満事

四八

今月の十八日は、弘長元年五月十二日に相當するといふことであるが、それは日蓮聖人伊豆伊東御法難の聖日なのである。日蓮聖人は『時を知るを大法師となす』と仰せられて、宗教家は時代の動きに對して、それがどうなつて行くかを見定めて、其處に國家人民の採るべき道を教ゆる者であるから、世の先覺者とも國師とも仰がるゝのである。邪念がなく清い鏡のやうな心の持主には諸法の實相がハツキリと映つるから、いふ所に謬りがない譯である、だから聖人は未萌を知ると崇敬される。か様な聖者の言教を尊重しないといふことになれば、個人としても、社會としても國家に於ても大きな不幸である、然るに世の中には正しい説をなす者よりも、寧ろ小才覺の者がうまく立ち廻つて重用される傾向が多いから、眞の人類幸福は得難いであらう。理想文化の建設といふ様な大きな事業は矢張り偉大な聖賢の指導に俟つべきである。では果して左様な聖人が現

代に需めらるか世界中何處にソナ偉人があるか、無いではないかといふ。けれ共有難い事にはそれが今、現に私共の直前に居られるのである。即ち聖典がそれである一歩も踏出さずして大聖に接し、其の高教を頂戴出来ることは限りない幸福であり悦樂である。

科學文明の進んだ今日、精神文化だとか宗教だ道徳だといつても、腹が空では戰は出来まい、何よりも先づ生活第一義だといふことが各方面で力強く叫ばれて居る。勿論日蓮主義は物と心とを別々に離して精神ばかりを高調するものではない、結經には『煩惱を斷ぜず、五欲を離れずして、諸根を淨め諸罪を滅除することを得』と説かれてゐるやうに、本能欲は認められるが、併しそれに執著はせない。一體物質には限量があつて萬人の望み通りに充足せしめるといふことは出来まい、翻て心の方には局限がない、無礙自在なものであるから心が主となつて物が従となれば

平安である、満足することが出来る。けれ共、物に心が使はることになれば繫縛の世界となる、そこに闘争が起る。現代がそれではないか！

私共の一身上に於て、肉體ばかりを大事にして暖衣飽食にあこがれ、本心をば練磨することを忘れた生活状態を畜生道といふのである。體格ばかりを氣にして運動獎勵をした結果それで立派な人物が出来たかといつても、ハイ左様でござるとはいへない『身つよき人も心かひなければ多くの能無用なり』と聖人は仰せられてゐる。双葉山のやうな腕力はあつても大衆には及ぶまい、マラソンの選手でも犬や馬には叶ふまい、飛ぶことは鳥に劣つてゐる、眼は蠅にも劣る、何處に自慢したり誇るべき所があるか、古人が『人は萬物の靈長』といつた通り、人としての尊卑は其の本心の眼を開いてゐるか、眠つてゐるかである。本心の眼が覺めて居ない者は根本的に迷ひの眼鏡で一切のものを律して行くから物事がうまく運ばないのは當然なんである、六識の働きだけではそれこそ個人的であり禽獸に類するものなんである、だから聖人は『心地を九識にもち、修行をば六識にせよ』と仰せられてゐる。九識といふのは阿摩羅識といつて佛陀の境地である、即ち理想は最高において、實行は最低から始めよといふのである。物心は一如であるといつても、又而二であるが、畢竟本心に依つて調整された

心的一元である。現代人は口ばかり立派なことを云つても實行が少しも伴はない、従つて社會の風潮は益々低下して生活難を招く譯である。すべてがそれ一方に傾寄り過ぎて中道のあるを知らぬ處に陥は醜出されるであらう。

世間の人が宗教を尊ばないのは宗教家にも大きな罪があると思はれる、宗教家が自己偽稱であつたり、道義を棄し慈悲報恩の念が薄い、但名譽とか利財の點にかけては俗人以上にほしがらる。これでは人に教ふる資格は毫もない譯で、經には『狗犬の僧』と申されて居る、瘦狗が塵箱に餌をあさる様に、金持ちの檀家を獲ようとお互が血眼になつて争奪戦を演じてゐる醜狀を指されたのであつた。道心あらん者は愧づべく懺悔すべきである。一方爲政者に於ても宗教に對しては無關心で、却て知識階級の者は無信仰を誇とするに到つた事は國家の爲めに最も悲しむべきだと思ふ。宗教を捨て、精神運動を企て、も決して効果は擧るまい、倫理道徳のみで人心が覺醒するものならば教主釋尊の御出現はなかつたであらう、天台傳教立正等の諸大師捨身弘法の必要はない筈であつた。現實の問題だけで萬事は解決しないのである、其の根本対策から善處する、即ち遠き過去のことから出發して將來を考ふべきなんである。

凡そ白いものは汚れ易い、汚れたが最後なかく、始めの白にかへすことは困難である。私共の本心もズーツと大音

は清淨なものであつたが、漸次きたない埃にまみれて主公の本心はかくれ客塵で一バイに覆はれて了つた、所謂元品の無明といふ奴が出發點になるものだから迷妄の衆生といはれる。これを本復させ常樂我淨の佛身を成就せしむるには、特種の方法が講ぜられねばならぬ、そこに本師釋尊の大慈大悲は結局私共の爲に妙法華經の良薬が遣し與へらるることであつた。妙法が過去、現在、將來に亘つて一番優れてゐる明教だといふことは、一切經の上にハツキリして居る、これを三説超過と申すのである。日蓮聖人が本化上行の權能を發揮されて、本門壽量品の三秘、事の一念三千の妙法蓮華經と高唱し、又他にもお勧め下さつた事は全く有難い。「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等この五字を受持すれば自然にかの因果の功徳を譲り與へたまふなり」と信仰の妙旨が述べられて居る。

宗教の正しい信仰が、いかに私共の人格を一變するかは、古來幾多の事實が證明してゐる。今やこの國家未曾有の大事變に際して眞に心から覺めて舉國一致の果を擧げ、億兆一心の實を結ぶものは獨り宗教の力に依つべきを確信する。而して其信仰なるものは我國に適合し、純一無雜の公明正大なものでなければならぬ、世間でいふ様に「信心は何様でも宜しい、信心するに悪いものはない」といふやうな間違つた觀念を一掃して最善のものを選択すること

が第一の肝要である、「善を善と思ふ程に小善却て大惡を醸す」と教へられた通り、自分では善いことである、立派な信者だと思つてゐても經文の鏡に照らされた時に其の是非曲直は明瞭となる。この原典たるべき經文をさしおいて、其の開祖の論說にのみ據る多くの世間の人々は何といふ淺見であるのか、かゝる思想に基いて來たからしてこの不統一な混亂な利己的な無責任な痛憤すべき相を呈したのである。志ある者は大に立正安國を高調すべき時である。人々は須らく信仰の寸心を改めて速かに一佛乘に歸し、正定聚を結成すべきである。幸にして正しい團結を得るならばモ一教はれた事になるのである。以上洵に端的に申したのであるけれ共、心ある人は深く味つて戴きたい。

精忠無比、勤王護法の祖師を讃仰せる日蓮門下の若人よ、「日蓮生を此土に得たり豈我國を思はざらんや」の一句を今、何と心得てゐる?! 世界の大事を見詰めた者にあつては、決して安閑として過されまい、最後の一人となつても猶正義を叫び、國土の大難を拂ふべきである。

終りに日蓮聖人が平素御修行なさつてゐたといふ法華經の迹門の肝心である方便品長行と、本門の肝心である自我偈を便宜上訓譯し謹記しておく、幾回となく、精讀する處に何物かを得らるゝであらう。

妙法蓮華經方便品第一

爾時に、世尊、三昧より安詳として起つて、舍利弗に告げたまはく。諸佛の智慧は甚深無量なり、其の智慧の門は難解難入なり、一切の聲聞・辟支佛の知ること能はざる所なり。所何は柯ん、佛曾て百千萬億無数の諸佛に親近し、盡して諸佛の無量の道法を行じ、勇猛精進して、名稱普く聞えたまへり。甚深未曾有の法を成就して、宜しきに隨つて説きたまふ所、意趣解り難し。舍利弗、吾れ成佛してより已來、種種の因縁、種種の譬諭をもつて、廣く言教を演べ、無数の方便をもつて衆生を引導して諸の著を離れしむ。所以は何ん、如來は方便・知見波羅蜜皆已に具足せり。舍利弗、如來の知見は廣大深遠なり。無量・無礙・力・無所畏・禪定・解脫・三昧あつて深く無際に入り、一切未曾有の法を成就せり。舍利弗、如來は能く種種に分別し、巧に諸法を説き、言辭柔軟にして、衆の心を悦可せしむ。舍利弗、要を取つて之を言はゞ、無量無邊未曾有の法を、佛悉く成就したまへり。止みなん、舍利弗、復説くべからず。所以は何ん、佛の成就したまへる所は、第一希有難解の法なり。唯

佛と佛と乃し能く諸法の實相を究盡したまへり。所謂諸法の是の如き相、是の如き性、是の如き體、是の如き力、是の如き作、是の如き因、是の如き緣、是の如き果、是の如き報、是の如き本末究竟等なり。

所謂諸法は如なり。是相は如なり。是性は如なり。是體は如なり、是力は如なり、是作は如なり、是因は如なり、是緣は如なり、是果は如なり、是報は如なり、是本末は究竟等なり。

所謂諸法如是なり、相如是なり、性如是なり、體如是なり、力如是なり、作如是なり、因如是なり、緣如是なり、果如是なり、報如是なり、本末究竟等なり。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

爾時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説いて言はく。

我れ佛を得てより來た、經たる所の諸の劫數、無量百千萬億載阿僧祇なり。常に法を説い

て、無數億の衆生を教化して、佛道に入らしむ、爾より來た無量劫なり。衆生を度せんが爲の故に、方便して涅槃を現ず、而も實には滅度せず、常に此に住して法を説く。我れ常に此に住すれども、諸の神通力を以て、顛倒の衆生をして、近しと雖も而も見えざらしむ。衆は我が滅度を見て、廣く舍利を供養し、咸く皆戀慕を懷いて、渴仰の心を生ず。衆生既に信伏し、質直にして意柔軟に、一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず。時に我れ及び衆僧、俱に靈鷲山に出づ、我れ時に衆生に語る、常に此に在て滅せず。方便力を以ての故に、滅不滅有りと現ず、餘國に衆生の、恭敬し信樂する者あれば。我れ復た彼の中に於て、爲に無上の法を説く、汝等此を聞かずして、但我れ滅度すと謂へり。我れ諸の衆生を見れば、苦海に没在せり、故に爲に身を現ぜずして、其をして渴仰を生ぜしむ。其心戀慕するに因つて、乃ち出て、爲に法を説く、神通力是の如し、阿僧祇劫に於て。常に靈鷲山、及び餘の諸の住處にあり、衆生劫盡きて、大火に燒かるゝと見る時も。我が此の土は安穩にして、天人常に充滿せり、園林諸の堂閣、種種の寶をもつて莊嚴せり。寶樹華果多くして、衆生の遊樂する所なり、諸天天鼓を撃つて、常に諸の伎樂を作し。曼陀羅

華を雨して、佛及び大衆に散ず、我が淨土は毀れざるに、而も衆は燒け盡きて。憂怖諸の苦惱、是の如き悉く充滿せりと見る、是の諸の罪の衆生は、惡業の因縁を以て。阿僧祇劫を過ぐれども、三寶の名を聞かず、諸の有ゆる功德を修し、柔和質直なる者は。則ち皆我身、此に在て法を説くと見る、或時は此衆の爲に、佛壽無量なりと説く。久しくあつて乃し佛を見たてまつる者には、爲に佛には値ひ難しと説く、我が智力是の如し、慧光照すと無量にして。壽命無數劫なり、久しく業を修して得る所なり、汝等智あらん者、此に於て疑を生ずること勿れ。當に斷じて永く盡せしむべし、佛語は實にして虚しからず、醫の善き方便をもつて、狂子を治せんが爲の故に。實には在れども而も死すと言ふに、能く虚妄を説くもの無きが如く、我も亦爲れ世の父、諸の苦患を救ふ者なり。凡夫の顛倒せるを爲て、實には在れども而も滅すと言ふ、常に我を見るを以ての故に、而も憍恣の心を生じ。放逸にして五欲に著し、惡道の中に墮ちなん、我れ常に衆生の、道を行じ道を行ぜざるを知つて。度すべき所に隨つて、爲に種種の法を説く、毎に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして。無上道に入り、速かに佛身を成就することを得せしめんと。

合 掌 三 昧

金 城 三 郎

高らかに我等合唱す初夏の 朝のしゞまにひとしく居りて
 幾十人の人等唱ふる題目の あな高々と天を震がす
 高らかにひとしく唱ふ題目の 太鼓の響の天にひろごる
 天が下われ等が唱ふ題目の 尊さをもて覆はれよ今
 高らかに我等が唱ふ題目の 今し嚴かに世に響き出づ
 高らかにわれ等唱ふる題目の 續まり行きて世の清まらむ
 題目を高らかに唱えわれ等いま 佛の國を造らむとする
 題目を高らかに唱えみ佛の 國造らむと日に合掌す
 一億の民が齊しくみ佛の 道を學はゞ國榮えなむ

み佛の道を學びてよき國を 興せとぞ希ふ同胞がみな
 み佛の道を學びてよき國を 興さんと行ず人等集まり
 一億の民が齊しくみ佛の 道學ぶ日に國は成らむか
 み佛の前に坐りて今日もまた 手を合せつゝ靜かに居れり
 み佛の前に坐りて國の幸 人の幸乞ふわれ等朝々に
 太鼓叩き門邊に來しは我が畏友 野口敬之が朝の早きに
 わが畏兄妹尾元義が高々と 題目を上ぐ顔あかくして
 わが畏友池田新一が一念の 讀經聞けば涙出にけり
 わが畏友朝日一郎とみ佛の 話するときこゝろあたゝかし
 み佛の道擴めむと師の君が 宣らす言葉はまこともて滿つ
 師の君が宣らす言葉の戀しくて 勤行の朝われ待ち兼ねつ
 師の君が打ち鳴らす鐘をこゝろして われは聞き居りその音の末も
 いつしかに起き出でゝ來し我が兒等が かたはらにありて手を合せ居り
 小さき手を合せしさまの美しさ み佛の手に似て居む子等は
 高らかに妙法蓮華經と奉る 我が題目を聞きませ佛

記事

本部 團報

伊豆御難會 「風大なれば波大なり、龍大なれば雨の猛きやうに、いよゝあだをなし、ますます憎みて御評定に僉議あり、頭をはぬべきか、鎌倉を追はるべきか、弟子檀那等をば、所領あらん者は所領を召して頭を切れ、或は牢にて責め、或は遠流すべし等云云、日蓮悦んで云く、本より存知の旨なり……」又云く、一國主の御用ひ無き法師なれば、あやまちたりとも科にあらじと思ひけん、念佛者並に檀那等、又さるべき人人も同意しけるとぞ聞えし、夜中に日蓮が小菴に數千人押寄せて殺害せんとせしかども、如何したりけん其の夜の害も脱れぬ。然れども心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて大事の政道を破る、日蓮が生きたる不思議なりとて伊豆國へ流しぬ」といかにも理不盡な爲政者の態度といふべきだが、其の當時はこれ以上の迫害は必然あつたことと推察するに難くない、これ程にしても世を利し、人を導びかうと菩薩の願行に敢然としてお起ち下さつた御恩は實に報じ盡せるものではないが、せめて思召しの千萬が一分でもお

手傳ひするこそ私共の光榮と思ふ。五月十二日は恰度日曜日に相當したので午後二時から和賀上人を煩せて謝恩教化講演會を催し得たことを嬉しく思ふ。たとへ一人でも眞に信仰の人が獲られるならば、こんな有難い事はない。そこに令法久住の深意は達成されるであらうから、燥らず倦まず様の下の力持ちが出来れば結構と思ふ。やがて一時に信ずる時代が必ず來ること大地を的とするなるべしである。

御書講座 毎週火曜日晚の小林一郎先生御遺文撰時鈔の讀講も五十餘回でいよゝ完結され、次回からは五大部中最後の報恩鈔がお話し戴くことになつてゐる。今や一般知恩報恩の念、薄らいだ道義上捨ておかれぬ時代に於て、本鈔の讀講は極めて有意義の次第であり、是非各位の御來聽を熱望して止まない。

酒悅立正青年團報

植物園記 五月の第一日曜日に於ける酒悅立正青年團の勤行日は、丁度五月五日の端午の節句に當り、洵にお芽出度い日だつた。

其の日は先づ午前六時半、酒悅商店御寶前に於て、磯部先生を御導師として、一同恭しくお勤めをなし、終つて朝食を

済ませ、朝日さん御執率の下に御店の前に整列、御挨拶並に人員點呼を終へ、五月雨燦る中を意氣揚々植物園に向つて行進した。

朝早かつた爲めか途中沿道には、吾々一行を珍らしげに見送つて居る人もあちこちに見受けられた。

磯部先生が、植物園まで一緒にお歩き下されたのに對しては、一同恐縮もし、感激して意氣益々軒昂たるものがあつた。

植物園に着いたのは、かれこれ三十分程も経つた頃だろう。其の時は雨も霽れて、園内は洗ひ清められ、玉砂利が黒く光り、新緑が滴るやうに見えた。そのあひだに、最う盛りは過ぎてゐたが、藤の花が紅々と染めてゐた。

我々は園内の眞急ぐな、砂利道を上らずに、入つた急ぐ左手の細い土手下の路を歩いて行つた。色々の木の名が札に書かれてある。中には、紫式部などいふ木の名があつたりして皆を喜ばした。

その細い路の途中に、池があつて金網を張り廻し、主には中には鴛鴦が澤山入れてあつた。朝早いためか、地上や水の上には浮んでゐる鳥は紛くて、すつと上の方の止り木に居たり、飛んだりする鳥の方が多かつた。

鴛鴦は水に浮ぶ鳥だと思つてゐたら、空中を自由に飛び廻る。槍に描かれた鴛鴦なども大抵は極つて仲よく泳ぎ廻るの

で、自在に空を飛ぶのを見たのは初めてだつた。これなどは考へやうに依つては、物の一面を見て、常に眞理だと思ひたがる吾々に對して何か教訓的なものゝやうに思はれた。

「鴛鴦は冬中寒いうちは毛並も美しいが、最う少し経つて暖かくなる頃には雌も雄も見分けがつかなくなる」

藤城さんが傍でこんなことを云つた。吾々には珍らしいことだと思つた。

「鴛鴦はうまく飼はないと臀の上部の兩側にはね上つた赤黄色の羽毛は仲々出来ないものだ。餌は皆種です」

これも藤城さんの御話だ。藤城さんの小鳥の知識には驚かさされた。

池の底の方を見ると其處にはまた夥しいおたまちやくしが居た。池の底を眞黒く覆ひ盡す程だつた。

「このおたまちやくしが皆蛙になつたら大變だらう」

誰かこんなことを云つた。

此の池から一寸行つた所に、有名な青木昆陽先生の甘露菫栽培の地があり、立札があつた。一同は昆陽先生の遺跡に亘んで暫く往時を回想した。

その先の貸席のある方の大きな池には、萬蒲が植つてゐたが、花にはまだ早かつた。貸席の方は、何か會があると見えて朝早くから學生が四五十人程集つてゐた。

こゝから上りになる。水がちよろ／＼と音を立て、流れる

池の小さい橋を渡つて松や藤の花の奇麗な小路を上つて行く時、そこらは一面の藤園山で、眞赤な霧島藤園が、盛りは過ぎてゐながらも全山を染めてゐた。

丘の小路を上り切つたところが廣場になつて居り、ブランコがあつた。村山君其他の者が早速飛び乗つて、空中に大きな輪を作つた。勢ひ餘つた者は、靴先を漕らし、落ちさうになつたりして皆を笑はせた。

廣場には誰が描いたか、圓を描いて、もう角力取つてゐる連中もゐた。伊藤さんと藤城さんが若い者を相手に角力を取つてゐる。皆中々元氣だ。

それが済むと今度は徒歩競争、往復八百米もあるところを、朝日さん達は二回も馳けた。流石に苦しくなられたと見えて、朝日さんは、露で濡れた草の上に仰向けになつてぐつたりして居られた。

其の外腕角力や押しつくだ。寸刻もちつとして居ない。

はち切れるやうな若人の體内には絶えず跳動するものがある。彼等はお題目を唱える時、太鼓を叩く時と全く同じカウコウでそれ等の競技に熱中してゐる。酒悦立正青年團は、其の名の示すが如く洵に佛の行者のやうに熱烈であり、その信仰の如くに物事に熱心だ。私はこれ等の有様を見て、今日程若い者を羨ましく思つた事はなかつた。酒悦の方々は皆幸福だと思つて、何だか胸の中が熱くなつた。

お午近くなつたので、廣場の一寸下の方の東屋に行つた。よくこのやうなお話を向きのものがあつたものだ。先づ磯部先生の御法話があつた。この日磯部先生には、大變御氣分がよかつたと見えられ、随分と長い御話をして下された。先生のお書きになられた謄寫刷りのお話を頂き一同感激した。

磯部先生のお話が終つたので、これに對し朝日さんが厚く御禮の言葉を述べられた。

御話が済んで、さてお午の御辨當だ。皆よく暴れ廻つたので、辨當が非常においしかつた。悉くが甘露となる辨當だつた。柏餅も腹一ぱい食べた。

食事が済んで、二時迄の自由散歩といふことで、三々伍々花壇や温室の方へ行つた。

雨はすつかり上つたけれども、遠くの杜や木々の梢が霞んで美しかつた。水墨の繪を見てゐるやうだつた。こんな日に植物園に來合せたのも何かの善根に因るものだろうと皆で話し合ひながら温室の方へと歩いた。温室には珍らしい西洋草花が澤山あつた。

見ることも、遊ぶことも、學ぶこともすつかり盡したといふ満足感で、皆が集たのは、丁度午後二時の豫定の時間だつた。正門前で一同整列、磯部先生がそこから歩いて、園ま

でお歸りになるといふので、一同先生に別れの御挨拶をなし
吾々は朝來た道を堂々瀾歩して上野まで歸つた。

今日の極めて愉快な有様を社長に見て戴けなかつた事を私
は一人で残念に思つた。

南無妙法蓮華經

(五月九日金城記)

團費誌料寄附金及維持費領收 (自四月二十一日 至五月二十日)

一金貳圓五拾錢也	東 京	野口英司殿
一金貳圓五拾錢也	市 川	金子喜通殿
一金四圓四拾錢也	門 司	河瀬由子殿
一金四拾貳錢也	豐 橋	田村仙作殿
一金貳圓五拾錢也	福 島	河島義郎殿
一金貳圓五拾錢也	日 立	長谷川鐵雄殿
一金貳圓五拾錢也	川 口	尾形多喜男殿
一金參圓五拾錢也	東 京	金指龜吉殿
一金貳圓五拾錢也	同	熊井康人殿
一金拾 圓也	同	同 前
一金拾圓九拾五錢也	同	酒悅商店殿
一金參 圓也	同	市川箔十郎殿
一金參 圓也	同	須田儀一郎殿
一金參 圓也	埼玉縣	

一金五 圓也	千 葉	立正安國會殿
一金參 圓也	山口縣	小野ツネ子殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	花島喜三郎殿
一金參 圓也	東 京	宇野博順殿
一金貳圓貳拾錢也	同	森山大平舍殿
一金貳圓貳拾錢也	富 山	開 爲太郎殿
一金貳圓五拾錢也	演 松	彦坂寅吉殿
一金五 圓也	東 京	内田義久殿
一金拾 圓也	横 濱	金子光和殿
一金貳圓五拾錢也	同	齋藤勇吉殿
一金拾 圓也	千 葉	川村善助殿
一金拾 圓也	東 京	目黒駒太郎殿

右雜有入帳仕候也

財團法人統一團會計

佛說龍施女經

第十套の七

吳月氏優婆塞支謙譯

聞くこと是の如し、一時、佛、維耶離奈氏樹園に遊びたまひき。佛、長者須福の門外に到
りたまふ。須福に女有り。名けて龍施と曰ふ、厥年十四なり。時に浴室に在つて澡浴塗香し
て好衣を著く。佛の眉間毫相の光は、七重樓上を照らしたまふ。東向して 佛を見たてま
つれば門外に在つて住りたまふ。容貌端正にして星中に月の有るが如く、奇相衆好金色な
り、從容として諸根寂定せり。女 大歡喜して則ち自ら念言すらく、今 佛及び衆弟子を
見たてまつることを得たり、當に以て發意して菩薩行を作すべし、願くは我をして道を得て
佛の如くなさしめたまへと。魔 女の大意を發せるを見て心に不樂を爲す。念言すらく、
是の女今大福を興すに及んで 佛を求めんと欲す、必ず我が界を過ぎて多くの人民を度せ
ん、今我れ當に往いて其の道意を壞るべしと。魔 便ち下化して女の父の形象に被服を作

して、龍施に謂つて言く、今の所念は大重なり、佛道は得難し、億百千劫勤勞して懈らず、然して後に乃ち成ぜん、今世幸にして 佛有り羅漢を求むるに如かず、既に要らず得易し、且つ俱に度世の泥洹は異なること無し、何すれぞ 佛を貪り、久しく勤苦を負はん、汝は是れ我が女なるが故に汝に語らんのみ。龍施對へて曰く、父の言の如くならず、羅漢とは俱に度世すと雖も、功德は同じからず、佛智は大度にして十方空の如し、人を度する極りなし、羅漢は智少にして一時の若きのみ、何んぞ高才ある者小を樂はんや。魔復た言く、未だ曾つて女人の轉輪聖王と作ることを得たるを聞かず、況や乃し 佛と作ることを得んと欲するに於ておや、佛道は長久なり、羅漢を求めて早く泥洹を取るに如かずと。龍施報へて言く、我も亦聞く、女人は轉輪聖王と作ることを得ず、帝釋と作ることを得ず、梵王と作ることを得ず、佛と作ることを得ずと、我れ當に精進して此の女身を轉じて、竟に男子の身を受作すべし、蓋し聞く天下の尊は、菩薩の道を行じて億劫に懈らざれば後には皆作佛することを得んと。魔、女意の轉ぜざるを見て、益用て愁毒し更に急ぎ教を作して言く、菩薩行を作さば當に世間を貪らず、壽命を惜まざるべし、今汝精進して能く樓上より自ら地に投ぜば後に 佛を得べしと。龍施念言すらく、今我れ 佛を見たてまつりて

乃ち自愛して菩薩道を欲す、父教ゆるに精進を以て身を棄てて 佛道を得べしと、我れ何ぞ此の危脆の命を惜まんやと。女即ち欄邊に叉手し 佛に向つて言さく、我れ今自ら天中の天に歸し、一切愆念を以てせん、我が所求を知ろしめせ、請くは軀命を棄つるも菩薩を捨てじ、身を以て 佛に施し、願つて散華せん、と 以て便ち身を縦にし自ら樓下に投ず。空中に於て未だ地に至り及ばざるに女身則ち化して男子と成れり。時に 佛乃ち笑みたまふ、五色の光、口より出て 一佛刹を照し、還つて頂より入れり。賢者阿難 前み跪いて問ふて言さく、佛は妄りに笑みたまはず、願くは其の意を聞かしめたまへ。佛、言はく、阿難、汝、此の女の自ら空中に投じ、化して男子と成れるを見るや不や。對て曰く見たり。

佛說阿彌陀經

第拾套の四

姚秦龜茲三藏法師鳩摩羅什譯

是の如く我れ聞きき、一時、佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在ましき。爾の時に、佛、長老舍利弗に告げたまはく、是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界有り、名を極樂と曰ふ。其の土に佛有ます、阿彌陀と號づく。

舍利弗、阿彌陀佛は成佛より已來今に於て十劫なり。

舍利弗、少善根福德の因縁を以ては彼の國に生ずることを得可からず。舍利弗、若し善男子善女人有つて阿彌陀佛の説くを聞きて名號を執持すること、若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日、一心にして亂れずば、其人、命終の時に臨んで、阿彌陀佛諸の聖衆と與に現に其の前に在り。是の人、終る時に心顛倒せず、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得む。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓			金壹圓五拾錢
日蓮主義精要			金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰			金拾五錢
法華經要品			金五拾錢
日生上人レコード(四冊)			金參圓廿五錢
本尊意識に就て			金貳拾錢
釋尊の八相成道			金貳拾錢
法華經の心髓			金壹圓五拾錢
佛敎の心髓			金壹圓七拾錢
本多日生上人			金拾錢
勸行作法			金壹圓
佛敎の心髓			金壹圓
河合診明著			
皇道と日蓮主義			金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ七十
財團法部
統一出版部
振替東京九四二〇番

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込へ總テ前金ノ事
▲御金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和十五年五月二十七日印刷納本
昭和十五年六月一日發行
(第五百四十二號)

不許複製
編輯部 滿事
發行所 磯部 滿事
東京市小石川區音羽町六ノ十七
印刷人 山田 英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

發行所 財團法部
統一出版部
東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



次 目

聖訓摘要	本多日生
開目鈔講話(第三十五講)	小林一郎
本團役員改選	
如來壽量品綱要	山口智光
福島支部報	
南無妙法蓮華經	磯部滿事
日蓮主義學生講演會を開催して	窪田哲城
團費誌料寄附金及維持費領收	